

栄光に満ちた王

メシアであるイエスの
良い知らせ。

Hans-Jörg Ronsdorf

栄光に満ちた王

メシアであるイエスの良い知らせ

Hans-Jörg Ronsdorf

第2増補版　2022年8月（ドイツ語版）
イラスト：フリーデリケ・ツェシュキー（Friederike Zeschky）
本文：Hans-Jörg Ronsdorf――無断転載を禁じます
Albis 6½, 87477 Sulzberg
連絡先メール：hj-ronsdorf@t-online.de
www.hans-joerg-ronsdorf.de
ドイツ語版のISBN 978-3-9826027-7-6
校閲：ガブリエーレ・ジンガー（Gabriele Singer）
表紙デザイン：フリーデリケ・ツェシュキー（Friederike Zeschky）、トビアス・シュトリッカー（Tobias Stricker）
引用した聖書翻訳（ドイツ語版）：
Elberfelder, CSV
Das Buch, Roland Werner
Die Zürcher Bibel
Die Gute Nachricht
Neue Genfer Übersetzung

私たちは福音主義の自由教会のキリスト者です。あるいは、福音派とも呼ばれます。呼び名は私たちにとって大切ではありません。ほかの多くの教派とともに、私たちはただ、イエス・キリストを信じ、この方に従おうとしているキリスト者です。

著者は塗装技術の分野で自営業を営んでいます。1964年生まれ。妻クリスティーネ（Christine）とのあいだに、成人した5人の子どもがいます。聖書を学ぶことが大好きです。そして、ほかの人たちが聖書について取り組んできたことも。

私たちは特に優れたキリスト者ではありません。けれども、良い王がいます。この方に私たちの最善をささげたいのです。聖書があるので、私たちは自分が信じていることの確かな源を持っています。

私たちは、イエスを神の御子として、世界の主として、王の王として礼拝し、仕えているすべての人とともに、すばらしいゴールへ向かって旅をしています。

1 三つの言葉で語る良い知らせ

三つの言葉で、キリスト教のメッセージ、あるいはキリスト教信仰のいちばん大切なことを、ずばりと言い表し、まとめることができるでしょうか。はい、三つの言葉が良い知らせの核心です。けれども、それについて語るべきことがまだたくさんあるのも明らかです。ここに、それぞれが単独でこの核心を言い表す三つの言葉があります。前もってもう一度強調しておきます——これは氷山の一角にすぎませんが、まさにその頂です。福音とは、イエスについての知らせです。十字架につけられ、よみがえり、力と栄光の冠を受けて神の御座に着いた、あの人についての知らせです。まとめると、世界へのメッセージはこうです：

> イエスは主です！
>
> イエスは王です！
>
> イエスはメシアです！

これが福音、良い知らせ、喜びの知らせです。福音を語る人は、これをいちばん大切なこととして最初に置くでしょう。この三つの言葉が要点をずばりと言い当てています。すべてはここにかかっています。この言葉は、世界の歴史の転換点と、神の救いの歴史の結晶点を言い表しています。この三つの言葉は、前線が入れ替わり、権力が交代したことを確かにしています——死の力が打ち負かされたのです。希望があります。良い未来があります。今や答えがあります。多くのことが新しい光の中に見えてきます。イエスが主であるということが、すべてを変えるのです。読み進めてください——そして、真の王のこの物語に心を開いてください。イエスの物語と、その栄光に満ちた結末、それが良い知らせです。ある方がすべての人とすべてのものの主となったということは、だれにとっても自動的に良い知らせになるわけではありません。けれども、だれにとっても良い知らせになりうるのです。そ

のためにこそ、このイエスの物語があるのです。だからこそ、これは良い知らせなのです。

なぜ私はイエス・キリストを王と呼ぶのでしょうか。新約聖書の書き手のほとんどがそう呼んでいますし、旧約聖書の書き手たちでさえ、すでにそう呼んでいるからです。さらにこういうこともあります：キリストとは「油注がれた者」という意味です。古代には、ユダヤ教でも同じですが、祭司や預言者のほかに、とりわけ王たちが油を注がれて王とされました——私たちが王の戴冠について語るのと同じように。油注がれているとは、特別な職務のために選ばれているということです。

メシアはキリストと同じ意味です。前者はヘブライ語から、後者はギリシア語から来ています。ですから、この称号とキリストという名は、いつもイエスが王であることに焦点を当て、それを高く掲げています。すべての人とすべてのものを治める統治者、支配者として——とりわけ、もちろん、ご自分の民、すなわちキリストを告白する人々のために、またその上に立つ方として。彼らにとってイエスは主です。そして王です。神の国は同時にキリストの国でもあり、そこに属する人は、この方だけを王とすることができるからです。

ちなみに、主イエス・キリストについての聖書箇所では、はっきり王と呼ばれていないところでも、王というモチーフがしばしば見て取れます。それについては、続く章でさらに述べます。

あらゆる時代の最大の問いは、今もこれからも、こうです。だれが私たちの大きな問いや問題を克服できるのか——あるいは、それを解決する手助けをしてくれるのか。そして一人ひとりにとっては、だれに自分をゆだねることができるのか。人類として、私たちはだれに自分をゆだねることができるのか——人々と、その住まいであるこの惑星を救うために。

人々が自分をゆだねてきた、この世界と歴史の偉人たちには、しばしば一つの共通点がありました：彼らは権力の人で、陰謀をめぐらし、腐敗し、人の命を踏みにじってでも突き進んだのです。人々を利用し、無意味な戦争へ送

り込みました。民が飢えているあいだ、ぜいたくに暮らしました。今日の権力者たちがそこから癒やされていたら、どんなにいいでしょう。

だれかに属したい、だれかに――だれでもいいから――自分を明け渡したいという憧れがあります。ためらうことなく、ほかの人に自分をゆだねたいという憧れです。それを強く感じる人もいれば、そのような人を見つける望みを捨ててしまった人もいます。神は私たちの憧れにどう答えてくださるのでしょうか。神は世界に、自分を明け渡してもよく、明け渡すことができ、しかもそれによって滅びることのない一人の方を与えてくださるのです。

自分のことではなく、私たちのことを考えてくださる方。王であるにふさわしい王。私たちと、私たちのいちばん深い必要と憧れを知っている方。そして、それを心にかけてくださる方。本当にそれを望み、それができる方。人間であるとはどういうことかを知り、身をもって経験した方。私の確信は、そして多くの人の確信はこうです。この方こそ、キリストであるイエスです！

あなたを、このただ一人の王と知り合うようにお招きします。短くも濃い発見の旅にご一緒しましょう。しばらくのあいだ、心を開いてみてください。

なんという喜びでしょう！山々を越えて、勝利の使者が駆けて来ます！良い知らせを携え、平和と救いを告げ知らせ、シオンの町に言います。「あなたの神は全世界の王である！」

イザヤ書52章7節

さらに読み、深めるために：使徒の働き2章33～36節、3章13～20節、4章10～12節、13章37～39節、17章30～31節、ダニエル書2章44節、ゼカリヤ書9章9節、14章9節、マタイの福音書27章11節、ヨハネの福音書18章37節、ヘブル人への手紙7章1～3節、ヨハネの黙示録1章5節、19章16節、出エジプト記40章15節、サムエル記第一15章17節、16章3節、12～13節、サムエル記第二2章4節、7節、5章3節、17節、12章7節、詩篇89篇20節、列王記第一1章34節、39節、45節、5章1節、歴代誌第一11章3節、14章8節、29章22節、出エ

ジプト記28章41節、30章30節、40章15節、レビ記7章36節、民数記3章3節、ヘブル人への手紙2章14節、4章15節、箴言16章15節

2 今日でも王は必要なのでしょうか

このテーマに入る前に、まず大切なことを一つ。私は君主制の支持者でも、そのために闘う者でもありません。私たちの時代には、民主主義が望ましい国家形態だと考えています。民主主義は、政治的な力の均衡をいちばんよく保つことができます。そのような国に生きていることを感謝しています。皇帝であれ、王であれ、大統領であれ、主権を握る独裁者が権力を乱用する危険は、政治の仕組みによっては大きなものです。今の時代の出来事が、それをこの上なく痛ましいかたちで明らかにしています。けれども、人間が権力と影響力を持つところには、完全な安全は決してありません。永遠のこちら側には、完全な統治形態はありません。人間が完全でないかぎり、それは変わりません。そして、どの統治形態も、神の祝福のもとでは祝福となりえます。

それでも私は、すべての権限を持ち、あらゆる問いとテーマにおいて完全な権威を持つ王に一票を投じます。ただし、その王を信頼できるならば、です。その王がお金も兵士も必要としないことが確かならば。うそも欺きもない王。「心のきよい」方。自己中心的な動機のない方。有能で、この務めのために生まれてきた王。何の留保もなく自分をゆだねることのできる王。そういう方が私たちには必要です。この方、このただ一人の方のことを、これから語ります。これが良い知らせです。神の国の福音です。

そうです、私たちにはこの方、このただ一人の方が必要です。私たちの王として、私たちの主、私たちの神として。私たちを兄弟姉妹と呼んでくださる方。そして、実際にそのように扱ってくださる方。

主イエスには、私たちが今この瞬間にいるその場所から、直接語りかけることができます。この王はだれにでも耳を傾け、いつでもどこでも謁見を許してくださいます。聖書はこの謁見を祈りと呼びます。この方の御座に近づくことです。信仰によって、まるでそれが目に見える現実であるかのように。この王の御座は、私たちからたった一歩、たった一つの祈りの距離にありま

す――一歩踏み出せば、私たちは王と話しているのです。声に出して、小さな声で、心の中で。静かに、ためらいながら、疑いながら。泣きながら、叫びながら、ささやきながら。この方はすべてを聞いてくださいます。この方を呼び求めましょう。助けを、赦しを、自由を求めて！この方の手は差し伸べられています――その手をつかみましょう！

ずいぶん先取りしてしまいました。いちばん初めから始めましょう。

私の王、私の神よ、私の助けを求める叫びがあなたに届きますように。私はあなたにだけ祈るのですから！

詩篇5篇2節

「栄光の王、それはだれか。全能の主、この方こそ栄光の王。」

詩篇24篇10節

さらに読み、深めるために：ヨハネの福音書20章17節、マタイの福音書19章28節、ルカの福音書22章30節、テモテへの手紙第二2章12節、ヨハネの黙示録5章10節、20章4節、ローマ人への手紙5章2節、エペソ人への手紙2章18節、3章12節、ヘブル人への手紙4章16節、詩篇50篇15節

3 始まりに戻って――エデンの王たち

神は私たち人間を、ご自分の王としたいと望んでおられます。そうです、読み違いではありません！すべての人が、例外なく、女であれ男であれ、女王であり王であるべきなのです。まさにそのようにして、すべては始まりました。宇宙の王である神は、人を男と女に創造されました。二人で一緒に王の尊厳を持つ一組の夫婦です。彼らは神のかたちとして創造されたからです。彼らは神の代理人でした。王としての務めを持っていました。エデンの園と全地が、彼らの治める領域でした。この二人にとって治めるとは、世話をし、守り、耕すことでした。互いの上に君臨することでも、ほかの人々を支配することでもなく、人々や被造物を搾取することでもありませんでした。

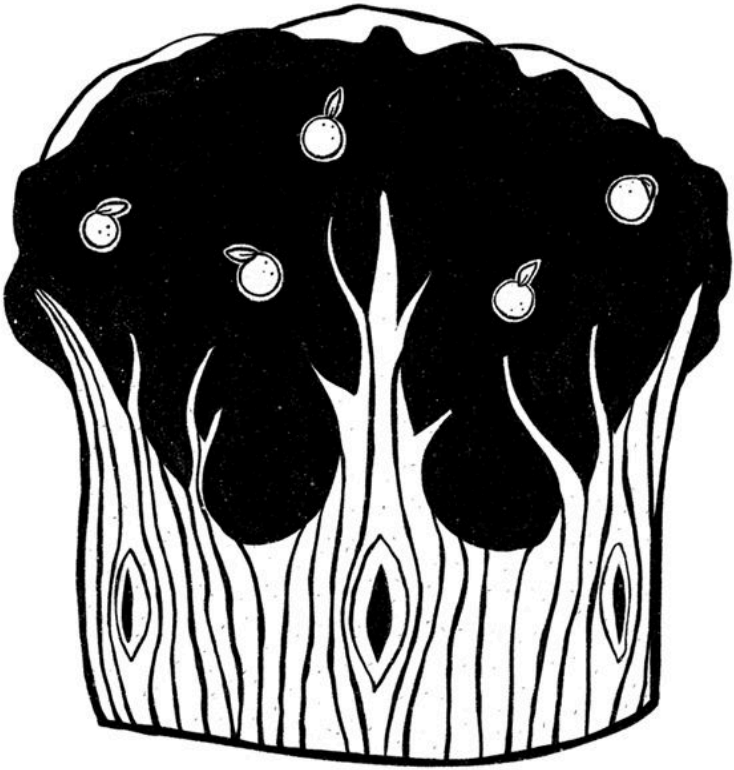
古代オリエントでは、創世記とその創造物語が生まれた時代には、これは驚くべきことでした。反文化的でした。時代精神に逆らうものでした。神々の子であるという特権を持っていたのは、王たちだけでした。民主的にではなく、自分の力で王になった者たちです。要するに、より強い者たちです。そして、その地位を子孫に受け継がせました。それ以外の人々はみな、しもべであり奴隷であって、今日私たちが知っているような人権はありませんでした。

王と女王、アダムとエバには――比喩的な意味で――宮殿が、あるいは神殿がありました。エデンの園は二人への神の贈り物であり、彼らのすべての子孫のために考えられたものでした。楽園は全地に広がっていくはずだったからです。すべての人にとって良い住まいとなるはずでした。

疑いなく、神はすべての上におられる王です。創造主として、保持者として、すべての上におられる主として。副王として、この人間の夫婦は創造主の似姿でした。神とともに、また神に代わって治めること、それが神のご計画でした。

楽園の園には何一つ欠けていませんでした。十分すぎるほどのものがありました。神ご自身が定期的に訪ねて来られました。神ご自身と同じように、人

間も心を配る者であるべきでしたし、そうありえたのです。



突然の決裂が、この牧歌的な生活を終わらせました。副王たちは、もはや自分たちの統治者を信頼せず、従いません。創造主が自分たちのためを思ってくださっているのかどうかを疑います。自分たちの幸せに欠けている何か良いものを、神が出し惜しみしているのではないかと。

そこで彼らは、取ってはならないとはっきり命じられていたものを取ります。創造主と被造物の違いを示す戒めです。彼らは善悪の知識の木から、禁じられた実を食べます。悪は、それを行ったときに初めて知るものです。一線が越えられ、知識を得た代価は高くつきました。このときから、すべてが

変わります。もはや楽園と神の目に見える臨在が守りと安らぎを与えるのではなく、生きるための闘い、エデンの外での絶え間ない生存競争が始まります。もはや何一つ確かではありません。自然は厳しく、人間も厳しくなっていきます。

人間の王としての尊厳は残ります。けれども、それは傷つき、神のかたちはゆがめられてしまいました。しかもあまりにひどく、人間がほかの人間を支配し、暴力を自分のものにし始めるほどです。彼らは自分をほかの人々の上に立つ王にします。創造主を偶像に置き換えます。生存競争の中で、競争が始まります。強い者が勝ちます。あるいは生き残ります。王としての尊厳は、私たち人間によってゆがめられます。人間が神の良い理想よりも、野の獣に似てしまうことも珍しくありません。

私たちはそれを感じ取り、ときどき、何となく始めのころのようなものを夢見ます。自由で、愛に満ちたもの。そして正しいもの。私たちは受け入れられることと安心とを切に求めています。私たちは実際、今生きているこの世界、私たちによって今のようになってしまった世界とは別の世界のために造られているのです。

万物の王である神が、それで良しとされるなら、神は神ではないでしょう。神は私たち人間以上に、それに満足しておられません。私たちの最善を求めないなら、神は神ではないでしょう。神の心は私たちのために脈打っています。神は私たちを愛さずにはいられないのです。神はご自分の物語を書いておられます。世界の歴史が、神の救いの歴史になるのです。あなたも私も、私たちはみな、その一部です。あるいは、その一部になることができます。

さらに読み、深めるために：創世記1〜4章、詩篇8篇、ヤコブの手紙3章9節、ローマ人への手紙5章12〜21節、テモテへの手紙第一2章3〜7節

4 王たちの民

とはいえ、神はいつもおられましたし、今もおられます。エデンの後も、エデンの外でも。けれども、もはやエデンでのような仕方ではありません。隠れていて、目に見えません。神は霊です。神はどこにでもおられます。今日もです。神は私たち人間のために、良いことのためにそこにおられます。たとえ私たちがそれを見たり感じたりしなくても。何しろ神は、すべてを無から創造し、それを保ち、生かしておられるのです。神は無限の方で、造られたすべてのものの外におられますが、それでも、私たちはこの方の中で、この方によって存在しています。私たちは神の被造物です。神はすべてのことを、どんな細かいことまでも知っておられます。神は私たちを手放されません。

人々は当時、目に見えない神の名を呼び、祈り始めました。この神、永遠の王は、ご自分の人々を顧みられました。けれども彼らは、今日とほとんど変わらず、自分勝手な道を歩みました。宗教において、文化において、家庭生活において、政治において。神のかたちであるという王の尊厳、神と同じように心を配る者であることは、生きる指針になっていません。そうなっているのは、ほんのわずかな人だけです。それでも、内なる声がすべての人に、本来どうあるべきかを思い起こさせています。どうあるべきでないかも思い起こさせています。良心は、自分自身とほかの人を守るために、人間に与えられたのです。

始まりのころのような王でいられるのは、宇宙の王とともにいるときだけです。この方が私たちの人生の一部であるときです。私たちは、そのように造られました。神から遠く離れた私たちの内にある空洞を、神は満たしたいと願っておられます。私たちはそれを、神の代わりになるあらゆるもので満たしてきました。空洞を満たしてくれると信じている偶像と取り替えてきたのです。それでも、神は家族を持ちたいと願っておられます。王の家族を！

神が歴史を書かれるのなら、私たちは歴史に目を向けなければなりません。アブラハムは一つの里程標、新しい出発でした。彼とともに、神とその人々との物語は新しい次元を得ます。彼は祝福となり、多くの子孫を持つことになります。その息子イサク、次にヤコブとその十二人の息子たちが、イスラエルの民の父祖です。エジプトで彼らは奴隷になります。小さな民が生まれます。ヤハウェ、「わたしは『わたしはある』という者」が、彼らをご自分の民として選ばれます。解放の出エジプトが、彼らをエジプトの奴隷状態から荒野へと導き出します。ここで神は彼らと契約を結ばれます。彼らは王たちと祭司たちの民となるのです。

民全体との新しい出発です。モーセは彼らの王であり、祭司であり、預言者です。彼らを導き、神の前で彼らのためにとりなし、神のことばを彼らに語ります。律法、十戒は契約の一部です。後に、それは古い契約にすぎなくなります。始まりのときと同じように、今回もまた決裂が起こります。神の民は目に見える神、金の子牛を造ります。牧歌的な関係はかき乱されます。神の民の中の違反と罪は、償いと赦しを必要とします。いけにえの奉仕が定められます。

王たちとして、祭司たちとして、また選ばれた国民として、彼らは世界の諸国民の模範であり、それによって道しるべでした——あるいは、そうなりえました。生ける創造主なる神に仕え、この方を知り、その本質と現実を照り返すはずだったのは彼らでした——かつてアダムとエバがエデンでそうしたように、祭司として神の御前に生きながら。

彼らの物語は続きます。私たちの物語もそうです。彼らはカナンの地に住み着きます。落ち着くまでには何年もかかります。

それからしばらくして、こう記されます。各自が自分の目に正しいと見えることを行っていた。その地には王がいなかったからである。

そして、たとえ自分が王であっても、あるいは王を持っていても、民全体が王たちと祭司たちから成っていても、それで自動的に神が考えておられたとおりになるわけではありません。始まりのときに神のかたちが罪によって損なわれたのと同じように、王たちや祭司たちが罪を犯すときにも、そうなり

ます。王や女王が自分の役割と尊厳にふさわしく生きないとき、私たちはそれをよく知っています。何かであること、肩書きを持つことは、一つのことです。私たち人間というのは難しいものです。私たちの内には、罪と呼ばれる一種の重力が働いています。私たちはその罪に翻弄されているだけではありません。しばしば、その共犯者なのです。私たちには助けが必要です。救いと解放が必要です。

詩篇139篇、ヘブル人への手紙1章3節、使徒の働き17章27〜29節、創世記4章26節、詩篇10篇16節、24篇8節、29篇10節、イザヤ書6章1節、創世記12章2節、出エジプト記12章、19章6節、20章

5 神の心にかなう王

聖書の歴史記述では、さまざまな指導者がいわば王に準じる役割を担いました。アブラハム、モーセ、その後継者ヨシュア、あるいは預言者サムエルのように。けれども、ダビデの台頭によって、私たちは人間の王の原型にたどり着きます。そして、それによって彼は、この本のテーマである来たるべき王の模範となり、その始祖ともなるのです。

弱さや過ちがあったにもかかわらず、ダビデは神の心にかなう人として描かれています。彼は約束されたメシアのひな型となります。この預言的な幻が明らかにされていくと、来たるべき王が単なるもう一人のダビデの子ではないことがはっきりしてきます。それはもっと偉大なダビデ、それどころかダビデの主となるのです。解けない謎のように聞こえます。王イエスにおいて、この謎は解けます。

この新しいダビデは、メシア待望の象徴そのものとなります。彼は、解放をもたらすメシアの救いの時代のしるしです。分裂したイスラエルの北王国と南王国を再び一つの国にまとめ、昔の日々をよみがえらせるはずの時代です。それが人々の期待でした。実際には、少し違ったかたちで成就することになります。予言が間違っていたからではなく、正しく解釈されていなかったからです。

ダビデは神の心にかなう人です。神は彼を心に深く受け入れられました。彼に欠点がなかったからでも、ましてや罪がなかったからでもありません。むしろ逆です。彼の人生では、多くのことがうまくいきません。彼は姦淫を犯し、人を殺し、ひどい父親です。なぜ彼は神の前で特別な位置にあったのでしょうか。その秘密はこうです：ダビデは、それでもなお神を求めたのです。敗北と失敗のただ中で、彼は神を求めました！何度も何度も。人生の終わりに、彼は打ち砕かれていました。神の望まれるすべてのことに服しました。彼は重い罪を犯し、その結果を苦く味わわなければなりませんでした。彼の人生がどれほどもろくても、彼は神の恵みといつくしみを経験していま

した。そして、新しいダビデによる永遠の王国を保証する契約、ダビデ契約に頼ることができました。

ダビデの物語は、すべての失敗者に勇気を与えます！そして私たちは、この物語の一部になります。来たるべきメシア王は、イスラエルの境界を打ち破ります。来たるべきメシアの国は、全地を満たすのです。

いつの日かダビデの王座で永遠の王権を持つのは、だれなのでしょうか。DAVIDUS REX、ダビデの王となるのはだれなのでしょうか。そして、それはいつなのでしょうか。

サムエル記第一16章13節。ダビデの物語はサムエル記第一・第二と歴代誌にあります。マタイの福音書22章42〜45節

6 王を待つ――預言

想像してみてください。あなたが、波乱に満ちた歴史を背負い、困難のただ中にある小さな国民の一人だとします。この民の聖なる書物には、一人の王が来るという約束が数多く記されています。だれにもまさる方、人々が夢見るすべてを持ち、それ以上を持つ方です。長い時間をかけて生まれ、集められたこれらの書物は、繰り返しそのことを語ります。イスラエルの民の希望はメシアです。この王への期待は、小さな国民の鼓動です。それがこの民を生かしています。本物の、生きた希望です。

メシア待望には一つ欠けていることがあります。メシアがいつ来るのか、だれも正確には言えません。そして、どのように来るのかも、だれにも言えません。しばしば力と栄光について語られます。けれども、苦しみと死と恐れについても語られます。それはどのように成就するのでしょうか。そして、その両方が同時に本当になりうるのでしょうか。ヘブライ語聖書の言葉は、さまざまな期待を生み出しました。その点では意見が分かれていましたが、メシアが来るということについては分かれていませんでした。

イエスが生まれたころ、メシア待望は手が届きそうなほど身近なものになっています。直接知らされたわずかな人々、幼子と母を見た人々にとって、大いなる日がやって来たのです。

このメシア王に結びつけられた期待は、これ以上ないほど大きなものでした。イスラエルは、あるいはその残りは、ローマ帝国の一部です。世界の首都はエルサレムではなく、ローマです。メシアはそれを変え、ひっくり返すはずでした。権力の問題を、イスラエルに有利なように決着させるはずでした。

けれども、まだメシアを、真の救いの王を当てにすることができたのでしょうか。何がそれを裏付けていたのでしょうか。預言、つまり前もって告げられたことは、この民の歴史の中で何度も成就していました。では、今は？何しろ、問題になっていたのは、この上なく大きな事柄でした。そして今回も

また、神は偽ることができないということが明らかになるのです。神は約束したことを守られます。

私たちは大きく跳んで、予告されていたすべてのことが成就する日々のただ中へと入っていきます。

しかし、エフラテの氏族の地にあるベツレヘムよ、主はあなたにこう言わせる。あなたはユダの町々の中で小さいが、あなたから、わたしの民イスラエルを治める者が出る。その出現は遠い昔から、とこしえの昔からである。

ミカ書5章2節

いくつかの預言：創世記49章10節、民数記24章17節、イザヤ書7章14節、9章7節、11章1節、40章3〜5節、11節、53章、エレミヤ書23章5〜6節、ミカ書5章2節、ホセア書11章1節、マラキ書3章1節、詩篇118篇22節、ゼカリヤ書9章9節、12章10節、13章7節、詩篇2篇、16篇10節、30篇3節、110篇1節ほか多数

7 皇帝アウグストゥスの福音

福音という言葉は、キリスト教的に聞こえます。けれども、いつもそうだったわけではありません。教会が考え出した言葉ではないのです。どんな種類の、どんな内容の良い知らせにも使われる、ごく普通の言葉でした。とりわけローマの皇帝崇拝は、この言葉を、皇帝について、その誕生について、帝国とその人々に祝福をもたらす皇帝の際立った資質についての良い知らせとして用いました。有名なプリエネ碑文がそう語っています。皇帝アウグストゥスが生まれた。この福音は、歴史上最初の、そして最大のローマ皇帝についての喜びの知らせとして、ローマ帝国に広まります。

> 「この日は全世界に別の姿を与えた――今生まれたこの方の中に、すべての人にとって共通の幸福が輝き出なかったならば、世界は滅びに陥っていたであろう。この誕生日に、自分にとっての命とあらゆる生命力の始まりを認める者は、正しく判断している――生まれたことを悔やまねばならなかった時代は、今ようやく過ぎ去った。すべての人にひとしく幸いなこの誕生日ほど、個人も全体も多くの良いものを受ける日はほかにない。人生のすべてを統べる摂理は、人々の救いのために、この人をこれほどの賜物で満たし、私たちと来たるべき世代とに救い主として遣わした――彼はあらゆる争いに終止符を打ち、すべてを栄光に満ちたものに整えるであろう。彼の現れにおいて、先祖たちの望みは満たされた――彼はかつての人類の恩人たちをことごとくしのいだばかりでなく、これより偉大な者がいつか来ることもありえない。神の誕生日は、世界に、彼に結びつく喜びの知らせ〔福音〕をもたらした。彼の誕生から、新しい暦が始まらなければならない。」

古代の読者が、もう一つの文学作品の表題をどのように理解したかを知りたいなら、このような文章を念頭に置かなければなりません。マルコの福音書は、自らを福音と名乗っています。マルコはイエスとその生涯を皇帝と並べて置きます。マルコは、自分の福音書の読者と聞き手に選択を迫るのです。

アウグストゥスについて当てはまるとされたことは、イエスとその国についても当てはまりました。福音という言葉だけが皇帝崇拝によって刻印されていたのではありません。キリスト論の称号の中で最も重要な「主」（ギリシア語でキュリオス）についても同じことが言えますし、最後に「神の子」という言葉についても言えます。

ユダヤ人のメシア待望は、すべての人とすべてのものにまさる支配者が来ることを見ています。ナザレのイエスは、あらゆる予言と期待の成就です。

アウグストゥスによって、またアウグストゥスについて語られることは、死ぬべき人間には決して成し遂げられません。だからこそ、彼は神と呼ばれ、また神の子とも呼ばれます。それでも、彼はほかのみなと同じように死にました。けれども今、同じように死ぬことになる一人の方が来られます。ただし、死ななければならないからではありません。この方は自ら進んで死なれます。ほかの人々のために。そして、この方は神です。始まりがありません――アウグストゥスとは違って。この方はご自分の死によって、人間の最大の敵である死に打ち勝たれます。そして、その原因を世界から取り除かれます――罪を。

マルコの福音書1章1節、ヨハネの福音書10章18節、ヘブル人への手紙2章9～14節、ヨハネの福音書1章29節

8 メシア王の誕生

どの誕生も奇跡です。私は5回、そのような出来事に立ち会うことを許されました。産む人の苦しみと喜びは、一瞬ごとに入れ替わります。古代には、出産が母子にとって良い結果に終わらないことがよくありました。

この王の誕生も奇跡です。おそらく、私たちの惑星がこれまでに経験した最大の奇跡です。ここで起こること、神が人になるということは、私たちの理解をはるかにけた違いに超えています。神ご自身と同じです。まったく異なる方、理解を超えた方です。神ご自身が小さくなられます。およそ3500グラムにまで。しかも、神の御子ご自身こそ、宇宙の創造主であり王なのです。

この王は、どのようにして私たちの世界に入って来られるのでしょうか。神はこれまでにも何度も現れてこられました。燃える柴の中に、シナイ山の上に恐ろしいほどの姿で、何度も主の使いとして。けれども、それは「短い訪問」にすぎませんでした。今、ずっと前から神が心に決めておられた、その時が来ました：神は人々とともに住み、とどまりたいのです。

神が人になる。またしても、要点をずばりと言い当てるたった三つの言葉です。神は人になっても、神であり続けます。けれども、死ぬべき私たちに理解できるかぎりで言えば、神であることを形づくっているものを後にされます。天の御座、全能、支配を。それを、奪い取ったもののように、しがみつくもののように、固く握りしめることはなさいません。

その時は、神の摂理の中で固く定められています。それは時が満ちたときでした。神の目から見て最善の時です。世俗の目から見れば、取るに足りない時です。当時の世界は、それに気づきません。皇帝アウグストゥス――彼の福音についてはすでに聞きました――は、帝国の住民を数え、登録させます。人々はそのために、自分の先祖の町へ行かなければなりません。身重のマリアが夫ヨセフとともに、ナザレからベツレヘムまで百キロ以上の道を歩いて行くと、どの家もいっぱいです。9月のことです。若い夫婦、ヨセフとマリアには、親類の家の上の部屋、つまりイスラエルの家の居住部分には、

もはや場所がありません。それでも二人は親類の家に身を寄せます。けれども、そこは一階、夜のあいだ家畜を中に入れておく場所です。家はすでにいっぱいです。出産のあいだ、男たちは外に出されます。お産はすぐに始まり、無事に終わります。それから二人は、初めて生まれた子を飼い葉桶に寝かせます。実際的な解決です。赤ちゃんはそこでよく眠ります。出産のための間に合わせの場所です。けれども、当時としては、そしてこのごく貧しい暮らしの素朴な夫婦にとっては、珍しいことではありません。むしろ、ありふれたことです。

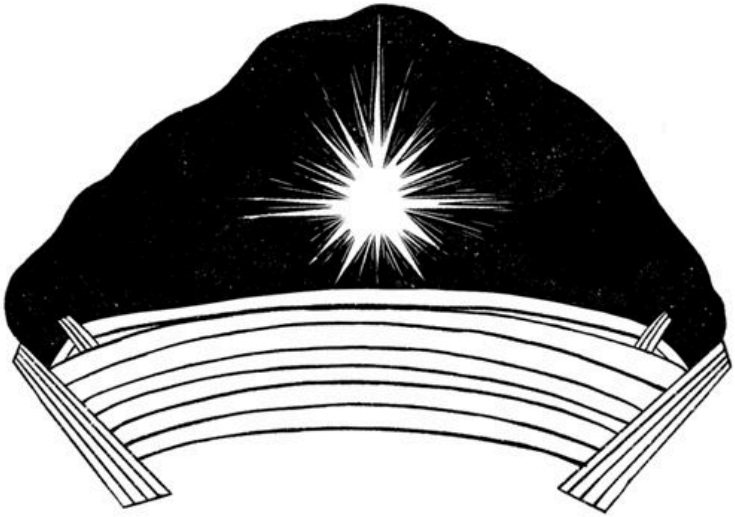
イエスは、裕福な人や有名な人のためだけに来られたのではありません。尊敬される人や高貴な人のためだけでもありません。この方は、名もない人々のために来られました。ほかの人々が二度と思い出すこともないような人々のために来られました。普通の人々。目立たない人、人目を引かない人。忘れられた人、見過ごされた人。それはすでに、この方の誕生の仕方に映し出されています。宇宙の創造主は、この上なく地味な状況の中で生まれました。神はあまりにも驚くべきことをなさったので、2000年後の私たちには、その意味の重さ全体をほとんどつかむことができません。神は、ありふれたものの中に永遠を書き込まれるのです。

そしてそれは、もしかすると神が、イエスを通して、あなたのありふれた、退屈な、毎日同じことの繰り返しの、取るに足りない人生のただ中に、永遠に驚くべき物語を書くことがおできになるということなのです。

このようにして、無力な赤ちゃんとして、ある若い夫婦に自分をゆだねて人生に入って来る王は、一つのしるしを立てています。その王は、自分がどのような方であるかを、最初から示しているのです。

それは宇宙的な出来事です。かつてバビロニアの地であったパルティア王国から、学者たち、天文学者たちがやって来て、星に従います。その星は彼らを、寸分たがわず誕生の場所へと導きます。もしかすると、バビロンにいたユダヤ人たちが自分たちの書物をもとに、何が起こっているのかを理解する手助けをしたのかもしれません。何とも不思議な、付随する出来事です。彼らは誕生の翌日にベツレヘムに着いたのではありません。何か月も後になっ

てからです。彼らはその場所と幼子を見つけます。彼らは高価な贈り物をもって、この幼子に栄誉を帰します。実際、彼らは神を礼拝するように、この小さな子を礼拝しました。ユダヤ人の王を最初に礼拝したのは、ユダヤ人ではなく、パルティア人たちなのです。



さらに、よく議論される処女降誕というテーマがあります。イエスには男性の父親がいませんでした。ヨセフではなかったのです。そのことでヨセフとマリアは互いに困難に陥りました。だれも二人をうらやみはしないでしょう。天は、ヨセフがここで何が起こっているのかを理解できるよう、あらゆることをします。すべてが正しいことなのだと、ヨセフを納得させることができます。

キリスト者でない人も、キリスト者も、処女降誕を比喩や作り話だと考えています。私はそうは考えません。処女降誕で問題になっているのは、マリアの生物学的・身体的な状態ではありません。奇跡とは、神の超自然的な創造の働きです。聖霊がマリアの妊娠を引き起こしました。イエスの「宿り」、受肉は、聖霊によって、いと高き方の力によって起こりました。宿され、身ごもられたのは神の御子です。この方は人としてそうであり、同時に神とし

てそうなのです。一つの奥義です。聖なる方であるためには、そうでなければなりませんでした。罪のない方であるために。私たちを罪から救うために。

大切なのはこういうことです：王は、私たちの人生の中に生まれたいと願っておられます。ごく粗末な宿でも、王には十分です。宮殿は必要ありません。がらくただらけの私たちの人生は、王が入って来られるに値しません。それでも王は、私たちを求めておられるので、入って来られます。私たちが王を迎え入れるなら、それでも王は入って来られるのです。

私はこの文章をクリスマスの時期に書きました。私のいちばん好きな歌には、こんな折り返しがあります——これ以上のものを私は知りません：

> おお、さあ、礼拝しよう、
>
> 王を。
>
> 栄光の王、
>
> 万軍の主を
>
> アデステ・フィデレス（Adeste fideles）、フリードリヒ・ハインリヒ・ランケ（Friedrich Heinrich Ranke）

たとえキリストがベツレヘムで千度生まれようとも、あなたの内に生まれないなら、あなたは永遠に失われたままである。

> アンゲルス・シレジウス（Angelus Silesius）

ヨハネの福音書1章1〜2節、14節、出エジプト記3章1〜6節、19章16〜25節、ヨハネの黙示録21章1〜3節、ピリピ人への手紙2章5〜10節、ガラテヤ人への手紙4章4節、ルカの福音書2章1〜7節、マタイの福音書2章1〜18節、ルカの福音書1章35節、詩篇2篇、ヨハネの福音書3章

9 王の出自と使命

長いあいだ、イスラエルは、あるいはその残りは、王を見ていませんでした。今王である者は、エドム人ヘロデでした。ローマの統治下にあるこの小さな国では、何一つあるべき姿ではありませんでした。イスラエルの真の王は、系図によってダビデの子孫であることを証明しなければなりませんでした。それでつまずくことはありませんでした。イエスはユダ族の子孫、ダビデの家系の子孫だったのです。

イエスは、生まれる前から存在しておられました。この方の誕生は、仏教の意味での生まれ変わりではありませんでした。この方は神の御子として、始まりもなく、誕生もなく存在しておられました。この方は永遠です。この方によって宇宙が造られました。地球も人間も。

御子はイスラエルに、神ご自身の民に遣わされました。この方は、自分たちのメシアを待ち望んでいたこの民の憧れでした。預言者たちがそう語ったのです。そして、そのとおりになりました。ダビデの子イエスが同時に永遠の神の御子であることは、長いあいだ隠されたままです。メシアは、イスラエルの歴史とその預言を成就へと導きます。私たちヨーロッパ人も世界の諸国民も、そこではまずは見物人にすぎません。イエスは、神がご自分の民に語られた多くの預言者の一人です。この方は、預言者の長い列の最後の方、決定的な方、最も偉大な方です。イエスが神であるので、神ご自身が語っておられるのです。

イエスは召命を受けて来られます。使命を帯びて世に来られます。この方はメシア、イスラエルの王となります。この方は、民をその罪から贖うために来られます。ローマ人からではありません。

神は御子を遣わすことによって、イエスをメシア、「油注がれた王」として立てられます。イエス・キリストにおいて、神はご自分の国、神の王としての支配を始め、打ち立てられ、その国でイエスが――王が――治めておられます。もう一度繰り返します：王と王の支配という考えは、もともとの創造

と結びついています。神は、ご自分のかたちであるアダムとエバに、この世界を治めてほしいと願われました。彼らは、後の多くの王たちと同じように、この役割に失敗しました。そこで神は、ご自分の御子を遣わし、この方が治めるようにされたのです。永遠に。神が治めることについていつも思い描いておられたとおりに。

彼らの王、メシア、主として、御子は今、教会——教派を問わず、すべてのキリスト者のこと——に使命を託しておられます。教会は、世界の前でこのことを証しするよう召されています：イエスこそ真の王であり、再び来られる王であること、そしてこの方にのみ救いがあることを。教会は神の民として、この国——神の支配——を体現するよう召されています。教会を通して、神の支配が目に見えるものになるのです。

皇帝ではなく、イエスこそが真の神の子です。この方は、ローマよりもはるかに古い王家の出です。ダビデ王の家の出なのです。ダビデには、永遠にダビデの王座に着く後継者が約束されました。それはダビデの子ソロモンではありませんでした。それはダビデの家系に連なるイエスです。つまり、ダビデの子でもあるのです。神の約束が実現するためには、それが前提です。約束は実現しました。イエスにおいて、約束は成就したのです。

この知らせは、前もって神の預言者たちによって告げられ、彼らはそれを聖なる書物に書き記しました。

この知らせは、神の御子であるこの方についてのものです。人としての面では、この方はダビデ王の子孫です。

そして同時に、この方は神の御子として立てられました。それは神の聖なる現実を展開する神の御霊の力強い働きによって起こり、私たちの主、メシアであるイエスの復活によって示されています。

ローマ人への手紙1章2〜4節

マタイの福音書1章1〜17節、2章1〜15節、ルカの福音書23章8〜15節、ヨハネの福音書1章1〜3節、コロサイ人への手紙1章16節、ヘブル人への手紙1章、

10章5節、ヨハネの福音書12章27節、サムエル記第二7章12〜16節、ローマ人への手紙1章1〜7節

10 王の生涯

王のように、ドイツ語で言えば「フランスの神さまのように」、ぜいたくに暮らす！ここで注目している王には当てはまらないことわざです。この方は、貧しい境遇の中に、王の栄誉もなく人生に入って来られたように、そのように人生を生きられました。短い人生、33年間の厳しい労働と自己放棄です。

そのような人生を、およそ700語のこの章で要約できるでしょうか。絶対にできません。この方の王としての人生を照らし出す、いくつかの思いのかけらにすぎません。それに加えて、心の片隅にとどめておきたい問いがあります。もし私たちの人生が700語で要約されるとしたら、どうでしょうか。何が残るでしょうか。二世代か三世代後に、だれかがまだ私たちのことを覚えているでしょうか。私は、尋ねてみなければ、自分の曾祖父の名前さえ知らないでしょう。

イエスのことになると、多くの人はしばしば飼い葉桶と十字架のことしか考えません。けれども、そのあいだの時も同じように大切であるに違いありません。そうでなければ、その時はなかったはずです。王の生涯は、王の死と同じように大切です。この生涯は、比類なく尊く、あまりにも清く良いものなので、イエスの死は言葉にできないほど悲しいのです。どうしてこのように罪のない生涯が、あのように終わることがありえたのでしょうか。

イエスの使命は、ご自分の民イスラエルとすべての人を、その罪から贖うことです。神の国を宣べ伝えることです。神の国は、この方の到来とともに始まりを告げていました。王がそこにおられたのです。そして王とともに、解放の力が。ローマ人、イスラエルを占領する者たちからの解放ではありません。違います。人々を奴隷にする悪の力からの解放です。これらの目に見えない力は、ローマの占領軍よりも破壊的でしたし、今もそうです。人々を苦しめ、社会生活から締め出す不治の病からの解放でもあります。見せかけの敬虔、律法主義的で偽善的な信心からの解放でもあります。愛も命もない聖

書学からの解放です。間違った期待からの解放です。自己中心からの解放です。不信仰からの解放です。そして何より、私たち自身からの解放です。

これらすべてが、真の王の生涯の特徴です。あるとき、ユダヤ人たちがこの方を王にしようとするところまで行きました。けれども、イエスは退かれました。この方は人々の心とその動機を知っておられました。ご自分の国のためには、新しくされた心が必要です。イエスの鼓動を持つ心。仕え、いちばん低い道を歩む備えのできた心です。

キリストの地上の生涯は、30歳になるまで、ほとんど隠されたままです。兄弟たちとともに過ごした、普通の、骨の折れる労働者の生活です。建築の職人として。ここでイエスは職業を学ぶだけではありません。ご自分が来られた国では知らなかった従順を学ばれます。天では、父と子と聖霊、三位一体の神が、愛と喜びの永遠の調和のうちに結ばれていました。地上では、御子イエスは厳しい生活に身をゆだねられました。いつ建築現場で働き始めたのか、だれにわかるでしょう。この方は長男でした。マリアの夫ヨセフについては、もう何も聞かれません。もしかすると、イエスが家族の責任を引き受けたのかもしれません。

30歳のとき、イエスはこの生活を後にされました。ヨルダン川で、ご自分の道を備えた人、バプテスマのヨハネからバプテスマを受けられます。それから、公の働きが始まります。メシアとしての使命です。これらすべては、四つの生涯の記録、あるいは伝記に書き留められています。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネです。この四つの記録は福音書と呼ばれます。それを読むことには価値があります。何度でも、何度でも。この四つは、合わせてメシア王の福音なのです。

この方の生涯そのものが一つのメッセージです。この方の説教、この方の言葉は、力にあふれ、本物で、生活に根ざし、知恵に満ちているので、人々は驚きのあまり言葉を失います。足の不自由な人をこの方は癒やされます。目の見えない人を見えるようにされます。死人がよみがえらされます。悪霊が逃げ去ります。王は出て行き、地を勝ち取られます。戦の将とは違ったやり

方で。この方の知恵と真理には、あらがうことができません。この方の愛の力が人の心を打ち負かします。今日に至るまで。

この方は私たちの一人であり、それでいてまったく別の方です。ぜいたくのない生涯。自己放棄に満ちた生涯。自分の家もない生涯。宗教指導者やパリサイ人から絶えず疑いの目を向けられ、攻撃される生涯。多くの人々がついて来ました。さまざまな動機から。この方は、不思議に増やしたパンで、多くの人々を満腹にされました。けれども、この方がいつも心にかけておられたのは、心、人生のいちばん奥にある方向でした。神が目標としてどうしても必要とされるものです。この方が心にかけておられたのは、清い心、あるいは清くされるべき心でした。

あわれみをもって、この方は不治の病の人々に触れられます。すると、彼らはすぐに癒やされます。この王の一度の触れ合いが、すべてを変えるのです。この王に触れていただきましょう。この方のもとに来た人、今日この方のもとに来る人を、この方はだれ一人として退けたことはなく、これからも決して退けられません。

> Just one touch from the King changes everything!
>
> 王の一度の触れ合いが、すべてを変える！

ヨハネの福音書21章25節、ペテロの手紙第一2章22〜24節、マタイの福音書1章21節、マルコの福音書1章、ヨハネの福音書6章15節、ヘブル人への手紙5章8節、マルコの福音書6章3節、マルコの福音書9章15節、10章26節、ルカの福音書4章32節、8章25節、9章43節、マタイの福音書8章20節、ルカの福音書5章13節、22章51節、マルコの福音書6章56節

11 王の良い知らせ

王の最初の公務は、宣べ伝えること、福音を説くことです。宣べ伝えることと癒やすことが、この方の日常です。この方は軍隊を率いてはいません。人々はただこの方について行き、この方の話に耳を傾けます。

王たちによくあるように、王の訪問を準備するために、前もって使節団がやって来ます。それはバプテスマのヨハネと呼ばれるヨハネで、彼が主の道、王でありメシアである方の道を整えます。彼のメッセージはこうです：清められるべきなのは道や家ではなく、心です。人々は悔い改め、向きを変え、生き方を変えなければなりません。らくだの毛の衣をまとった荒野の預言者が先触れとして、華やかさも栄光もなく来られる王を告げ知らせます。

悔い改めは、イエスのメッセージでもあります。ヨハネが牢に入れられると、イエスは働きを続けられます。この方は神の国の福音を宣べ伝えられます。悔い改めて福音を信じなさい！近づいている神の支配こそ、この世界のすべての問題への答えです。神の支配だけが、平和、癒やし、赦し、自由、安全、繁栄、安定をもたらします。メシアであるイエスにおいて体現された神の支配は、この世の国々の独裁とその失敗に対する神の答えであり、同じように暴力をふるう目に見えない支配者たちの独裁に対する答えでもあります。つまり、人々を滅ぼそうとして私たちの目に見える世界に働きかける、向こう側の世界の力と権威に対する答えです。

イエスは、神から遣わされ、立てられたこの国の王です。この方ご自身が、その人格において、国の知らせ、すなわち福音を体現しておられます。新約聖書の四つの生涯の記録が福音と呼ばれるのは、理由のないことではありません。この方の生涯、この方の行いと言葉が、良い知らせなのです。そして、それらは、後に使徒たちが手紙に書いたことと同じことを語っています。

屋根を通してイエスの足もとにつり降ろされた足の不自由な人をイエスが癒やすことになったとき、イエスは思いがけないことを言われます。何人かの

人々は、イエスならこの人を癒やせるだろうと信頼していたのでしょう――そうでなければ、来なかったはずです。けれども、イエスはまずその人に言われます：あなたの罪は赦された！罪は、足が不自由であることよりも大きな問題です。イエスは何よりもまず、罪の問題の解決をもたらされます。それが福音です。御使いは、マリアの夫ヨセフにこう言いました。

この方は民をその罪から救われる！

イエスとともに、良い知らせは疑いの余地なく本当に到来していました。イエスは、ご自分が語ったとおりの方でした。言葉と生き方が一つでした。

「こうしてイエスは、ご自分が育ったナザレにも来られた。安息日に、いつものように会堂に入られた。そして、聖書を朗読しようとして立ち上がられた。」

すると、預言者イザヤの巻物が手渡されました。イエスはそれを開いて、こう書かれている箇所を読まれました。

「主の霊がわたしの上にある。主がわたしに油を注がれたからである。主はわたしを遣わされた。貧しい人に良い知らせを伝え、捕らわれ人には解放を、目の見えない人には見えるようになることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。」

イエスは巻物を巻き、会堂の係りの者に返して座られました。会堂にいた人々はみな、じっとイエスを見つめていました。

イエスは話し始められました。「今日、この聖書のことばが実現しました」と、イエスは彼らに言われました。「あなたがたはその証人です。」

イエスご自身がそうであり、宣べ伝えた福音は、光へと、永遠のいのちへと導きます。古いもの、罪と死を後にするためにです。

「まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持っています。その人はさばきにあうことがなく、死からいのちに移っているのです。」

良い知らせとイエスは一つです――一方を持たずに、もう一方を持つことはできません。福音が宣べ伝えられるところでは、イエスが宣べ伝えられています。

イエスの福音を、私たちはこうまとめます。それは……

> 正義をもたらし、奴隷制を滅ぼし、貧困と闘い、病を癒やし、負債を免除し、罪から清め、永遠のいのちを与え、のけ者を受け入れ、最も低い社会的地位から引き上げ、神の真理を完全に効力あるものにします。

マタイの福音書3章1節、マルコの福音書1章4節、8章28節、ルカの福音書3章1〜18節、エペソ人への手紙2章1〜3節、コロサイ人への手紙1章13節、2章15節、マルコの福音書2章1〜12節、マタイの福音書1章21節、ルカの福音書4章16〜22節、ヨハネの福音書5章24節

12 王殺し――十字架

福音書記者ヨハネは、イエスを王として描いています。ほかの福音書記者たち以上にです。とりわけ、そう予想しないところで。まったくそぐわないところで。つまり、イエスの受難、その苦しみの物語、捕縛、有罪とされる裁判、そして最後に十字架の上での死においてです。

この受難は恐ろしいものです。不正です。恥知らずです。残忍です。人間性を奪う、獣のようなものです。けれども、この暗闇を貫いて、信仰は真の王の即位を見て取ります。受難の物語は、二重の意味で、メシア王が栄光を受け、高く上げられることを証ししています。

ダビデの子イエスは、ゲツセマネの園に入って行かれます。イエスが兵士たちに、だれを捜しているのかと尋ね、「わたしがそれだ」と言われると、彼らはその答えに突風を受けたように倒れます。まるで彼らが王の足もとにひれ伏しているかのようです。

王の尊厳と決意をもって、イエスは、弟子ペテロのように剣で抵抗することはなさいません。父の杯を飲むこと、それが御子イエスにとって大切なことです：神よ、あなたの恵みはいのちにまさります――かつてダビデがそう言ったとおりに。この方にとっては苦しみに満ちた杯、私たちにとっては主の晩餐における感謝の杯です。

イエスは、大祭司のしゅうとアンナスのところへ連れて行かれます。その婿カヤパは、かつてこう言っていました――政治的な嗅覚はあっても、自分の言葉の重さを知らずに。一人の人が民のために死ぬのは良いことだ。なんと真実なことでしょう。真の王は、自分の民のために死ぬのです！

イエスは今、ユダヤ人の小さな、抑圧された世界から、世界帝国ローマの宇宙へと連れ出されます。ローマの総督ピラトは権力を握っており、おそらく二人きりになったときに、単刀直入に尋ねます。あなたはユダヤ人の王なのか。

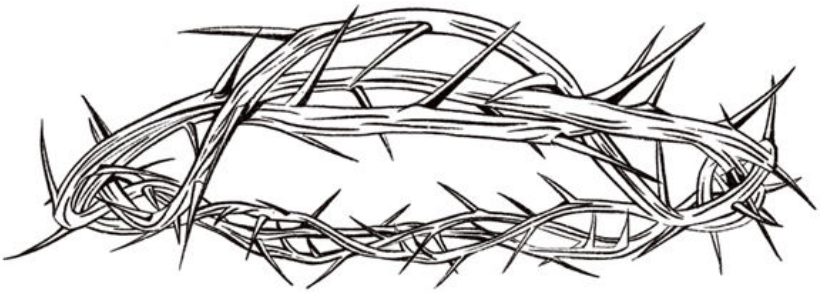
イエスは、ご自分が王であることを認められます。ただし、この世のものではない国の王です。あらゆる政治的な要求を超えた国、ローマ人のように武力で世界を征服することのない国です。天の世界から来た国です。別の法則を持つ国です。その天の王の人格において、地上の国の残忍な暴力によって打ち砕かれるままになる国です。少なくとも、そう見えました。

ピラトにとっては明らかです。これはユダヤ人の王だ。ピラトがどれほどの嗅覚を示しているかは驚くべきことです。ローマ人であり偶像礼拝者である彼が、イエスをいわばユダヤ人の王にするのです。彼は群衆に向かって率直に言います。「見よ、あなたがたの王だ！」彼は王の札まで、十字架の上に打ちつけさせます。だれもがまさにそれを知るべきなのです。イスラエルの指導者たち、イエスを訴えた者たちは、ピラトによって極限まで挑発されます。彼らはイエスの死を、それも十字架での死を望んでいるからです。

ピラトは知らずして、イエスについての真理を保証しています。イエスには何の罪もなく、そしてイエスは彼らの王である、と。ユダヤ人たちはローマの皇帝を選びます。自分たちの真の王イエスを、彼らは退けます。

次に私たちが目にするのは、いばらの冠をかぶせられ、赤みがかった紫の外套を着せられたイエスです。真理について証しするために来られた王の、血まみれの戯画です。いばらの冠をかぶった王の威厳です。

ゴルゴタへ、イエスはご自分で十字架を背負って行かれます。そこで人々は、その体から衣をはぎ取ります。十字架に釘で打ちつけます。それを立てます。イエスは、ご自分で予告されたとおりに上げられます。王は、ご自分の王座に着かされます。拷問の柱、木の十字架という王座に。



裸にされ、血まみれで、姿の損なわれた、痛みに満ちた一人の人。息を引き取る前のこの方の叫びは、王としての叫びであり、この方にとって、すべての人にとって、私たちにとって、解放と贖いの叫びです。完了した！

私たちのためにささげられたのです。私たちをご自分のもとに引き寄せるのは、この十字架につけられた方です。ピラトでもなく、どの皇帝でもなく、メシア王イエスです！この処刑場にいるこの人が、私たちの避け所、私たちの償いの場所となります。ここでこの方の血が私たちの罪を覆い、神との平和をつくり出します。この方の十字架の血による和解です。神との平和、そして私たち人間のあいだの平和も、今や可能になります。神の、血に染まり刺し貫かれた手が差し伸べられているのです！

これこそ世界の真の王、天の王、全世界の支配者、主の主です！自分の力を脱ぎ捨て、私たちのために王座を十字架と取り替える備えのある方は、私たちの礼拝にふさわしい方です。そのうえ自分を殺す者たちのために、神に、ご自分の父にとりなす方は、私たち人間から言葉を奪います。私たちは、このような神にふさわしい者だったでしょうか。

十字架は、ローマ人の権力と、十字架につけられた者たちの破壊、滅亡、いや、彼らとその記憶のすべてを消し去ることとを見せつけるものです。強い者が弱い者に勝つのです。弱さのうちに、イエスは十字架につけられました。宇宙の支配者である神にとって、それこそが勝利です。逆説的に見えますが、愛の勝利なのです。

十字架は今も、これからもスキャンダルです。キリスト教信仰のしるしとして、それは変わりません。十字架と十字架につけられた者を、一つの宗教の創始者にするなど、狂気であり愚かさです。そこには、美化したりロマンチックにしたりできるものは何一つありません。それはあまりに奇妙で、あまりに矛盾していて、あまりにさかさまです。けれども、この恥辱の柱において神の知恵と愛がその頂点に達すると信じるすべての人にとって、十字架と、そこで起こったことは、救いをもたらす神の力です。救出です！苦しむ神、十字架につけられた神は愚かなことです。けれども同時に、それは毎日人々の心を動かし、変え、新しい人にするメッセージなのです。

ヨセフの物語は、メシアのひな型です——兄たちはヨセフを穴に投げ込み、エジプトへ売り、そこでヨセフは、キリストと同じように、苦しみに満ちた回り道を経て副王となります。

ヨセフが兄たちのところに来たとき、彼らはヨセフの上着、彼が着ていたあや織りの長服をはぎ取り、彼を捕らえて穴に投げ込んだ。その穴は空で、中には水がなかった。

創世記37章23〜24節

ヨハネの福音書18〜19章、マタイの福音書26章36節〜27章56節、マルコの福音書14〜15章、ルカの福音書22〜23章、ローマ人への手紙3章21〜26節、コリント人への手紙第二13章4節、コリント人への手紙第一1章22〜24節、コロサイ人への手紙1章20節、エペソ人への手紙2章16節、ピリピ人への手紙2章8節

13 なんという王

（歌詞はドイツ語の原文のまま）

Was für ein König, der sein Land verlässt für mich. Und alles hingibt, was ihm lieb und wichtig ist. Der sich aufmacht und weit in die Fremde zieht, um zu suchen die, die er von Herzen liebt. Der nicht ruht bis auch der letzte seiner Freunde bei ihm ist, der voll Sehnsucht und voll Freude mich in die Arme schließt.

Wer so ist, der ist wahrhaft königlich. Diesen König liebe ich.

Was für ein König, der ein großes Festmahl hält für all die Schwachen und die Armen dieser Welt. Der uns seine Brüder, seine Schwestern nennt, weil er wie wir das Leben hier auf Erden kennt. Was für ein König, der aus Liebe seine Krone niederlegt und sie eintauscht gegen eine, die aus Dornen ist.

Was für ein König, der sein Leben für mich gibt, wo ich doch nicht von edler Herkunft bin. Was für ein König, der dem Tod ins Auge sieht und ihn als Erster ein für alle Mal besiegt. Was für ein König, der den Weg geht, der noch nicht gegangen ist, weil dieser Weg für uns der Weg in die Freiheit ist.

ロータル・コッセ（Lothar Kosse）、2011年、許可を得て掲載。

14 墓の中の王

王は特別な仕方で葬られます。盛大な行列と、ふさわしい墓所をもって。十字架につけられた犯罪者は、見せしめのために何日も十字架にかけられたままにされます。それから、十字架から遠くない共同墓穴で最期を迎えます。その体は獣の死骸のように扱われます。十字架の上で、これらの人々は打ち砕かれます。そして、彼らについてのあらゆる記憶が消し去られます。

けれども、ここにかかっているのは、いのちの創始者です。二人の犯罪者とともに殺されたのです。この方はこれからどうなるのでしょうか。十字架刑のドラマの中に、小さな希望の光があります。アリマタヤのヨセフは最高法院の議員で、ひそかなイエスの弟子です。今、彼の時が来ました。今こそ彼は、自分がイエスの弟子であることを証明します。裕福な人として、彼は備えをして、自分のための墓を手に入れていました。何トンもある大きな石が前に置かれた岩の墓です。その石は、地面の溝に沿って墓の入り口の前に転がされます。

ヨセフは大きな勇気を奮い起こし、ピラトのところに入って行って、遺体の下げ渡しを願います。ピラトは、イエスがあまりに早く死んだことに驚きながら、それを許します。ヨセフは遺体を十字架から降ろします。一人でか、助け手とともにかはわかりません。彼はイエスを亜麻布に包みます。急がなければなりません。安息日は夕暮れとともに始まるのです。彼はイエスを自分の墓に納め、自分のためには新しい墓が必要になるだろうと考えます。

イエスの生と死において、多くの予言（預言）が成就しました。ほかのどの人にも当てはまらない特別なことです。葬りについてさえ、何百年も前に書かれています。彼の墓は悪しき者たちとともに定められたが、彼はその死のとき、富む者とともにいた。

使徒たちが福音を語るとき、しばしば、イエスが死んだだけでなく葬られたことにも必ず触れています。だれもそれを付け足しとして片づけるべきではありません。葬られた人は死んでいるからです。意識を失っているのではあ

りません。仮死状態でもありません。体のすべての機能が、もとに戻ることなく止まっているのです。イエスという章は、墓とともに、ひとまず閉じられます。

十字架での死によってすべてが終わったように見えたのなら、埋葬によってはなおさらです。それから墓はローマ人によって封印され、特別部隊によって見張られました。ユダヤ人の律法学者たちは、イエスの弟子たちが遺体を盗みに来ないよう、確かめておかなければなりませんでした。けれども、弟子たちからの危険はほとんどありませんでした。彼らは逃げてしまっていたのです。弟子たちとは違って、律法学者たちは、イエスが何度か、ご自分の暴力的な死について、しかし同時にご自分の復活についても語っておられたことを覚えていました。何かが起こりそうな気配がありました。まだ何かが起こるのでしょうか。

古代教会の信仰告白には、こうあります：「葬られ、死の国に下り」。いのちの創始者は、ご自分が死んで死者となることによって、打ち破ることのできない死の砦に押し入られます。後にイエスはご自分についてこう言われます：わたしは死んだ。

それから、この方が死の国に下ったとき、死の向こう側で起こったことは、十字架で起こったことに劣らず重要です。けれども確かなのは、それもまた私たちのために起こったということです。死ぬべき人間のために。私たちがこの方とともに生きるためにです。

彼は虐げられたが、不平を言わずにそれを負った。屠り場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている羊のように、彼は黙ってすべてを耐え、不平を言わなかった。

拘束と裁判のさなかに、死が彼を襲った。彼の民があまりにも大きな罪を負ったので、彼のいのちは絶たれた。この世代の人々のうち、だれがそのことに思いを巡らすだろうか。

彼の墓は悪しき者たちとともに定められたが、彼はその死のとき、富む者とともにいた。彼は不正を行わず、その口に欺きはなかったからである。

イザヤ書53章7〜9節

使徒の働き2章22〜46節、3章15節、ヘブル人への手紙2章10節、マタイの福音書27章57節、マルコの福音書15章43節、ヨハネの福音書19章38節、イザヤ書53章9節、コリント人への手紙第一15章4節、ペテロの手紙第一3章18〜22節

15 死の国の王

王たちも死ななければなりません。私たちがここで語っているこの王は、苦しみに満ちた死を遂げました。十字架の上で、暴力的に処刑されました。それから、大きな石でふさがれた岩の墓に納められました。

人間は、自分の体以上のものです。死後も生き続けます。その意識、その霊魂は殺すことができません。霊魂は人間の全体にあたり、人間は来世においてもとどまり、完全な人格です。物質的な、死ぬべき体を持たずに。キリスト教信仰の外にも、証拠とまでは言わないにしても、人間が自分の体の外に存在し、目に見えない来世の世界の周囲をあらゆる感覚で知覚することができるという手がかりは、数えきれないほどあります。

この来世が死の国です。ヘブライ語聖書では、それはシェオルと呼ばれます。新約聖書では、死者たちがとどまる冥界はハデスと呼ばれます。そこには、正しい人のための領域と、正しくない者のための領域があります。前者は「アブラハムの懐」と呼ばれます。さらにいちばん下の領域があり、そこには、ノアの時代の前と、その時代に人間と交わった反逆の、堕落した御使いたちが閉じ込められています。人間が罪に陥り、神が大洪水によって終止符を打たれるに至ったことに、彼らは決定的に関わっていました。創世記はそう伝えています。古代教会は、今日まで毎週日曜日にキリスト者たちが声を合わせて数えきれないほど唱えている信仰告白の中で、こう宣言しています。死の国に下り。まさにそこへ、私たちには隠されていて、死を通してしか足を踏み入れることのできない冥界へ、その下へ、その中へと、この方、キリスト、王は行かれたのです。

もしかすると、読者には奇妙で古めかしく思えるかもしれません。けれども、聖書の世界観はかなり単純です：造られた目に見える世界と、造られた目に見えない世界があります。目に見えない世界には天が含まれ、そこに神が住み、治めておられます。それは、私たちに多かれ少なかれ隠されているこの世界を私たちが何とか思い描けるように、私たちが目に見える世界から

知っている言葉や概念で説明されます。神の天は上にあります。冥界、死の国は、いつも下、地の下にあります。地の下とは、墓だけを意味するのではなく、死者たちのいる、向こう側の、目に見えない冥界を意味します。

アブラハムの懐は安息の場所ですが、それでもヘブライ語聖書は、シェオルを、そこがすばらしいから行きたいと思うような場所としては描いていません。シェオルは死を、そして神が決して望まれなかった死の力をも表しているのです。

新約聖書は冥界をハデスと呼びます。ギリシア神話でも、この場所はそう呼ばれていました。後に、ハデスは冥界の支配者の名になりました。この場所は地獄とは区別されなければなりません。ハデスと地獄は同じものではありません。

あの十字架刑の日と、イエスの埋葬に話を戻しましょう。外から見れば静かになり、責めさいなまれたイエスの遺体は墓の中で休んでいました。安息日が始まりました。けれども、王は休んではおられませんでした。冥界では、とてつもないことが起こっていました。王は下って行かれたのです。死んだ者としてのみ、この方はこの死の国に下ることができました。そして死の君主と対決することが。古い蛇の穴へと下って行き、その頭を踏み砕かれました。強い者を打ち負かし、その家財を奪い取られました。捕らわれ人を解放するためです。

さらに苦しむためではなく、勝利し、解放し、宣言するために、この方はシェオルに下って行かれたのです。

いちばん底の牢獄へ、堕落した御使いの君たちのところへ、この方は下って行かれました。彼らには救いの知らせではなく、勝利の知らせを告げられました。彼らと、その闇の君主の計画がうまくいかなかったことを、彼らは知らなければなりませんでした。この方の死は、彼らの死を意味しました。闇のあらゆる力がたくらんだこの方の死は、彼らの勝利ではありませんでした。それは彼らの敗北だったのです。彼らにとって思いがけないことに、彼らは今、決して予想もしなかった場所で勝利者に出会い、その口から、人間のための救いが来たことを聞きます。死ぬべき者たちが闇の力とともに滅び

るのではなく、勝利と救いと永遠のいのちが今や成し遂げられ、罪人のために備えられているのです。それに値しないけれども、王があわれんでくださる罪人のために。

シェオル、あるいはハデスには、この十字架刑の日までに死んだ、神を恐れたすべての人もいました。彼らは死の国にいましたが、天のパラダイスにはいませんでした。今、約束された王が彼らのところに来られます。アブラハム、ダビデ、ヨブ、そのほか名の知られたすべての人のところに。栄光の王が入って来られ、数えきれない群れに迎えられ、あいさつを受けられます。彼らは望みを抱く捕らわれ人なのです！彼らの望みは、そこにとどまることではありません。王もまた、とどまるために来られたのではありません。彼らをそこから連れ出し、天のパラダイスへと導き入れるために来られたのです。

こうして、キリストが死なれたその日のうちに、ハデスからパラダイスへの大いなる出エジプトが起こります。この方は、十字架にかけられた強盗の一人に、大きな確信をもって言われたのです。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。この強盗は、自分の民のために戦い、すべての者を天の聖所へ、神の栄光に満ちた臨在の中へと導き入れる偉大な王に従って行きます。

後に残るのは、シェオルの廃墟と、そこにいる信じなかった者たちです。この方が、冥界で救いを告げ知らせた人々をもそこから解放されたということも、ひょっとするとありうるかもしれませんし、排除はできません。この方に出会う人、この方を呼び求める人は、どこにいようと救われます。この方はすべての人に対して豊かな方、このあわれみ深い栄光の王なのです。

王は私たちの人生とご自分を一つにし、人となられました。この方は、私たちが生きるべきであった生涯を生きられました。この方は私たちの死を引き受け、私たちの罪を私たちから取り去り、ご自分でそれを墓の中へ運ばれました。神はこの方の死を私たちのものと認めてくださり、私たちは生きることが許されます。新しい、永遠の、不死のいのちを。この方は下って行き、死の要塞を打ち砕かれました。私たちが生きることができるようにです。こ

の方はいのちへと戻って来られました。この方の死は私たちの死であり、この方のいのちは今や私たちのいのちです。

王の一歩一歩、王の生涯全体が、救いのために必要だったのです。そうでなければ、この方は十字架のためだけに現れればよかったはずです。王は、十字架と復活のあいだに、ご自分の民のために戦いを戦われました。岩の墓は、そのことを何一つうかがわせなかったのですが。目に見える世界での戦いは、死に至るまで戦い抜かれました。今度は、目に見えない世界での戦いが来たのです。この方はシェオルを略奪し、捕らわれ人を連れて、シオンの山、神の山へと上って行かれました。

こうして新しいいのちによみがえらされたこの方は、ノアの時代に神に逆らい、今は最終的なさばきまで捕らわれている、目に見えない世界の霊たちのところに行き、彼らにご自分の勝利を告げられたのです。

ペテロの手紙第一3章19〜20節

そのため、こう言われています。「彼はいと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えた。」この「上った」ということは、彼がまず地の低い所に下ったということでなくて何でしょうか。下った方ご自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上った方なのです。

エペソ人への手紙4章8〜10節

恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とハデスの鍵を持っている。

ヨハネの黙示録1章17〜18節

サムエル記第二22章6節、ヨブ記17章16節、詩篇16篇10節、30篇3節、68篇16〜24節、116篇3節、8〜9節、15節、118篇17〜27節、イザヤ書14章9〜15節、38章18節、45章2節、エゼキエル書31章16節、ホセア書13章14節、ゼカリヤ書9章9〜12節、マタイの福音書12章28〜29節、40節、使徒の働き2章22

～36節（詩篇16篇10～11節）、ローマ人への手紙10章6～10節（申命記30章12～14節）、コロサイ人への手紙1章16節、ペテロの手紙第二2章4節

16 王の復活

死者は生き返りません。例外のない規則です。特別な知識ではありません。だれでも知っています。死、私たちの有限さとはかなさは、私たちが満足していたいと思う地平ではありません。多くの人は、私たちが土に帰る以上のもののために造られていると感じています。これがすべてであるはずがない、と。

王は戦いに出て行かれました。ただ一人で、父の命を受けて。私たちのために。この方は死の力に立ち向かわれました。この方は負けるままにされました。戦いに敗れ、それによってかえって戦いに勝たれたのです。この方は死の力に打ち勝たれました。死をいのちへと転じられました。生涯のあいだに、この方は何人かの人をいのちへと呼び戻されました。今、この方ご自身が、父によって死者の中からよみがえらされます。例外のない規則が取り消されます。父なる神は、正しい方の死に沈黙してはおられません。イエスがこの苦しみを免れさせてくださいと祈ったとき、ゲツセマネで神は沈黙されました。御子とともに重い苦難の道を歩まれたとき、神は沈黙されました。イエスが十字架にかかっておられたとき、神は沈黙されました。けれども、それから父は語り、神の力のすべてを繰り広げて、イエスをいのちへと連れ戻されたのです。

十字架は、人間の残酷で冷たい「否」です。よみがえりは、神のはっきりと示された「然り」です。キリストに対する、いのちに対する、そして私たちに対する神の「然り」です。私たちが神の敵のようにふるまっているにもかかわらず。あるいは、自分の創造主にまったく無関心であるにもかかわらず。

イエスの死において、イエスは人間の敵意に出会われます。そして闇と死の力の敵意に。そして、私たちの罪のための身代わりのいけにえとなられます。よみがえりにおいて、罪責の問題、私たちの罪の問題が、ただ一度で永遠に決着したことが確証されます。私たちに有利なかたちで。よみがえりに

おいて、神と人間に敵対する目に見えないすべての力が打ち負かされています。神の国への道が開かれたのです！なんという王が、この墓から出て来られることでしょう！王は生きておられます！この方は死者の中から勝利のうちに戻って来られました。新しいいのちの未来が始まったのです。

よみがえられた！イエスご自身こそ、死を突き破り、閉ざされた岩の墓を後にされる方です。墓の布をきちんとたたんで残し、復活の世界へと入って行かれます。この方は、弟子たちが知っていたのと同じイエスです。手と足とわき腹の傷跡は、私たちのための苦しみと死の永遠の記憶、そのしるしとして残ります。けれども今、この方は新しい存在を生きておられます。閉ざされた戸を通り抜け、場所を移るのに時間を必要としません。弟子たちと魚を食べ、ご自分に触れさせ、今も永遠にまことの人であり続けられます。

墓の前の何トンもある石が取りのけられます。イエスが出て来られるためではなく、弟子たちと女たちが空の墓の中に入れるようにするためです。

この復活は、私たちが知っているすべてのことに反しています。そんなことがあるはずがない！おとぎ話でしょうか。神話でしょうか。この歴史的事実を論破しようと、多くのことが持ち出されてきました。けれども、世界の歴史の中で、これほどよく裏付けられた出来事はほとんどありません。そして、それに驚くべきではありません。この出来事によって、すべてが立ちもし、倒れもするからです。墓は空でした。あまりにも多くの目撃者が、よみがえられた方に出会いました。死ぬほどおびえていた弟子たちが、勇敢にキリストを告白する者となりました。彼らはもはや死を恐れませんでした。今日もあまりにも多くの人が、科学では説明のつかない、見たり聞いたりする超自然的な体験の中でキリストを経験しています。

メシア王の復活は、人類を新しい次元へと導きました。その次元には、すべての人のための場所があります。それは死とはかなさを永遠に墓の中に置き去りにします。私たちの前には新しい存在があります。あふれるほどのいのちです。永遠のいのちと新しい創造が、私たちの王が私たちのために戦い取ってくださったものを表しています。ご自分のいのちを懸けて。

この方の復活は、私たちをいのちへと引き出します。生きるに値するいのちが勝利したのです――この方によって。

主よ、あなたは私を死者の世界に渡されません！私が永遠に墓で終わることをお許しになりません。私はあなたに忠実であり続けるからです！

あなたは私にいのちの道を歩ませてくださいます。あなたのそばで、私は曇りのない喜びを見いだします。あなたの手から、永遠の幸いが私に来るのです。

詩篇16篇10～11節

ヨハネの福音書2章22節、使徒の働き2章24節、32節、3章15節、ローマ人への手紙4章24～25節、6章4節、9節、8章11節、34節、10章9節、コリント人への手紙第一15章、テサロニケ人への手紙第一1章10節、エペソ人への手紙2章1～6節、コロサイ人への手紙3章1節、テモテへの手紙第二2章8節

17 王の昇天

王イエスの昇天は逃避ではありません。単なる場所の移動でもありません：それはとてつもない結果をもたらす出来事です。実際、十字架や墓や復活に劣らず重要です。この出来事について耳にすることは、ほとんどありません。それは私たちに、ドイツでは父の日としても知られる春の祝日を一日もたらします。けれども、この出来事こそ、イエスの生と死に冠を授けるものなのです。

「昇天」は、ドイツ語では「ヒンメルファールト（Himmelfahrt）」、直訳すると「天への旅」で、奇妙に聞こえます。それは「旅」ではありませんでした――そうだとしたら、イエスは決して目的地に着かなかったでしょう。それは、私たちの目に見える内在の世界とはまったく異なっていながら遠く離れてはいない、神の天の世界へ、超越の世界へと踏み移ることでした。

イエスは凱旋の行列のうちに、もろもろの天を通って行かれました。この向こう側の世界のすべての存在がひれ伏します。ほかに選択の余地はありません。この道は神の御座にまで通じています。エルサレム入城に似ていますが、それでもまったく違います。十字架がこの方の後ろにあるからです。

一人の人が、私たち人間のために、神の父なる心へと至る道を切り開き、開け放ってくださいました。この方が道です。私たちは今、家に帰ることができます。父が私たちを待っておられます。父は私たちを迎え入れたいと願っておられます。

まずこの方が、王の息子のように、そこで迎えられました。父の日といえば、永遠の父である神が、ご自分の御子を歓迎されます。父は喜んで御子を迎えられます。天は喜びます。すべての御使いと天の存在が。御子が帰って来たのです。地上での33年を経て、この方は天の宮殿に戻られます。

この方は困難なことを成し遂げられました。永遠の救い、永遠の救いの恵みを打ち立てられました。新しい創造が生まれました。この方が人となり、死

に、よみがえられたことによって。この方が宇宙の統治の宮殿でこれほど待ち焦がれられ、今迎えられるのも、不思議ではありません。

これはすべておとぎ話ではありません。大きな影響をもたらす現実です。その結果は、まだ見通すこともできません。私たち人間は、直接それに関わっています。

私たちにとって、この昇天の出来事が意味しうるのは、ただ一つ、天の父と同じようにすることです。父が王イエスを迎え入れたのとまったく同じように、私たちもこの方を迎え入れましょう。この方を待ち望み、この方を迎えましょう。この方は私たちの人生にも入って来たいと願っておられます。この方はその備えができています。

ちなみに、この方が弟子たちの前でそのように雲に包まれて天に上って行かれたとき、二人の人、二人の御使いがいて、こう言いました。この方が今行かれたのと同じように、確かにまた来られる。目に見えるかたちで、雲に乗って。

あなたは凱旋の行列のうちに高い所に上り、捕らわれ人を引き連れて行かれました。あなたは人々から、逆らう者たちからさえ、贈り物を受けられました。確かに、神である主はここに住み続けられる！

主はほむべきかな！日々、主は私たちの重荷を負ってくださる。そうです、この方、神こそ私たちの救いです。

詩篇68篇18〜19節

マルコの福音書16章19〜20節、ルカの福音書24章50〜53節、使徒の働き1章4〜11節、ヘブル人への手紙5章10節、4章14節

18 王の戴冠

戴冠式は豪華な儀式です。何一つ惜しまれません。どの女王、どの王にとっても一度きりの出来事です。身分の高い客が招かれます。宮殿は飾り立てられます。けれども今、私たちは天について語っています。空間と時間の外では、私たちの想像の世界には限りがあります。ファンタジーやSFが私たちの想像力をかき立てます。けれども、メシア王イエスの入城と歓迎、そして天の、向こう側の次元での戴冠の祝いは、想像できるとしても、ほんのわずかしかできません。それでも、それはまったく現実のことであり、広く及ぶ影響を持っています。

イエスは栄光と誉れの冠を授けられています——勝利の冠です！それはおそらくオリーブの枝で編んだ冠ではありません。むしろ、私たちがそこから考えを進めることのできる比喩です。戴冠の祝いは十日間続きます。

父なる神、宇宙の王は、ご自分が与えることのできる最高の栄誉の座を御子に与えられます。御子を副王とされるのです。御子が語り、行うことは、神が行うのと同じことです。かつてエジプトでヨセフが、ファラオの代理人であったように。

天の父が示す栄誉は、身内へのひいきでも義理でもありません。イエスはこの座にふさわしいことをされたのです。この方がへりくだられたのと同じだけ深く、この方は高く上げられます。ベツレヘムの家畜小屋、きつい労働、無一物、さげすまれ、最後には十字架。この方は創造主であり、天の王であるにもかかわらず！すべての存在の中心にあるこの栄誉の座と、最高の栄誉の称号だけが、この方にふさわしいのです。

すでにダビデ王が、この神秘に満ちた言葉を書いています。

> 主は私の主に言われた。「あなたは、わたしの右に座っていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」

それは成就しました。あなたがこれを読むとき、それは過ぎ去った昔話ではありません。そのすべてに結果が伴います。イエスが主とされ、キリストとされたのなら、それは結果をもたらすでしょう。遅かれ早かれ。私たちの惑星にとって、一人ひとりの人間にとって。だれもこの主を、このLord of Lordsを避けて通ることはできません。



当時、イエスが天に上られてから間もなく、キリスト者たちはカタコンベや隠れ家でこのような歌を歌っていました。

> それゆえ神は、この方を比べるもののないほど高く上げ、あらゆる名にまさる名を栄誉の称号として与えられました。
>
> そしてイエスがこの名を持っておられるので、いつの日か、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、この方の前にひざをかがめるのです。
>
> すべての者が、イエス・キリストは主であると認め、それによって父なる神に栄光を帰するのです。

あるいは、そして下って来られたこの方は、その後再び、あらゆる天の中で最も高い天よりも上に上られました。こうして全宇宙をご自分の臨在で満たすためです。

また、……イエス・キリストの復活。この方は今――天に上られた後――神の右の栄誉の座に着いておられ、御使いたちと、すべての力と権威はこの方に従わせられています。

ちなみに、復活のときと同じように、高く上げられたメシア王についても目撃者がいます。かつての熱心党員パウロは、キリスト者を根絶やしにしようとする者は、彼らの主であるキリストご自身を攻撃しているのだと悟らなければなりませんでした。ほかならぬパウロにキリストが現れたのは、とてつもない恵みでした。さばきのためではありませんでした。ダマスコへの途上で、パウロは突然、天の栄光の輝きの中に立たされます。舞台の上でスポットライトを浴びているかのように。その結果は失明でした。三日後、それは癒やされます。この出会いの結果、パウロは完全に向きを変えられます。ただちに、できるかぎり速やかに、彼はイエスをメシアであり主であると宣べ伝えます。彼は一瞬にして、この人物こそ、預言に描かれ、告げられていたとおりのメシアであることを悟ったのです。彼にとって、すべてが一度にぴたりと合いました。

パウロより前の、もう一人の目撃者は、弟子ステパノでした。ユダヤ人たちは彼を石で打ちました。石が降り注ぐ中で、彼は開かれた天をのぞき見ることを許されます。イエスを見るのです。イエスは天の栄光のうちに立ち、死にゆく殉教者をご自分のもとに迎えようと、身をかがめておられます。

天においても地においても、すべての権威がこの方に与えられています。この方が治めておられます。この方が決定権を持っておられます。けれども、そしてこれが大切なのですが、この方の治め方は違います。皇帝や王や独裁者たちがするようにではありません。この方の統治は、無私で、正しく、真実で、愛に満ちています。この方の支配は、強制する力ではありません。この世界の悪は、暴力によって止められるのではありません。イエス、すべての王の上に立つ王は、ご自分のやり方でそれをなさいます。私たちが福音書から知っているとおりのやり方で。私たちはこの方を信頼することができます。この方は目標に到達されます。一言で十分です。それでこの世界のすべての力は止められるのです。

父がこの方に王座を与えられたのなら、この方が私たちの人生の王座も受けられることにならないはずはありません！真の王イエスは、王座を奪う者ではありません。私たちの人生でだれが王座に着くのかを決めるのは私たちです。人間、偶像、宗教、依存症、不安――そしてほかの多くのものが、私たちの人生の支配権を握ろうとしています。この方の支配だけが、私たちを奴隷にしない唯一の支配です。未来のある唯一の支配です。

私たちはどちらの側に立ちたいでしょうか。私はもしかすると、ときどき、私のメシア王イエスの力ある偉大さと栄光を過小評価しているかもしれません。だからこそ、私たちはこの方に、私たちの人生の王座を何度でも新たに明け渡すことができます。この方のもとには赦しと寛容があります。いつも新しい始まりがあります。この方は責めることをなさいません。この方は私たちを何度でも、ご自分の恵みの統治の中に迎え入れてくださいます。

私は夜の幻の中で見ていた。見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。

14 この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。

ダニエル書7章13〜14節

新約聖書における対応箇所。

イエスは（大祭司に）答えられました。「そうだ。しかし、わたしはあなたがたに言う。今から後、あなたがたは、人の子が全能者の右に座り、天の雲に乗って来るのを見ることになる！」

マタイの福音書26章64節

見よ、その方は雲とともに来られる。すべての目が、彼を突き刺した者たちさえもが彼を見、地のすべての部族は彼のゆえに嘆き悲しむ。しかり、アーメン。

ヨハネの黙示録1章7節

イエスはもろもろの天を通って、神の御座へと行かれました。エルサレムのイスラエル人たちは、ペテロのペンテコステの説教を聞いて嘆き悲しみます。イエスを殺した、その同じ人々がです。

大いなる門よ、広く開け、いにしえの戸よ、道を開けよ、栄光の王が入って来られるために。栄光の王、それはだれか。強く力ある主、戦いに力ある主である。栄光の王、それはだれか。全能の主、この方こそ栄光の王。

詩篇24篇7〜10節

ヘブル人への手紙2章7節、9節、詩篇10篇16節、エレミヤ書10章7節、10節、使徒の働き2章34節、ヘブル人への手紙1章13節、創世記41章41〜46節、エペソ人への手紙4章8〜10節、詩篇110篇1節、ピリピ人への手紙2章5〜11節、ペテロの手紙第一3章22節、使徒の働き9章1〜22節、7章54〜60節、マタイの福音書28章18節、ルカの福音書11章23節

19 私の栄光の王

（歌詞はドイツ語の原文のまま）

Der Wind, der in mir weht

Das Wort, das nie vergeht

Alpha und Omega

Der sein wird, ist und war

Berge verbeugen sich vor seinem Angesicht

Ein Wort und es geschieht

Er kommt und Ängste fliehn

Das ist mein König, König der Herrlichkeit

Sein ist das Reich, die Macht in Ewigkeit

Nichts muss ich fürchten, solange ich weiß

Dass der König der Könige nah bei mir bleibt

Der Weg auf dem ich geh

Das Licht auf meinem Weg

Meine Heimat, mein Zuhaus’

Deine Nähe füllt mich aus

Das ist mein König, König der Herrlichkeit

Sein ist das Reich, die Macht in Ewigkeit

Nichts muss ich fürchten, solange ich weiß

Dass der König der Könige nah bei mir bleibt

トビアス／サムエル／フント／ハルフスト（Tobias / Samuel / Hundt / Harfst）

20 王――ダビデの子、神の子

詩篇第2篇には表題がありません。それは王の詩篇で、私たちはダビデによるものだと予想するでしょう。そうかもしれません。けれども、ここで描かれている王は、ダビデではありえませんし、その子ソロモンでもありえません。むしろこの詩篇は、当時は存在しなかった比類のない王を指し示しています。詩篇第2篇の油注がれた者、メシアは、神に選ばれた王です。彼は王として油を注がれ、立てられ、同時に、その務めを果たすために御霊によって油を注がれます。

このやや長い章で前面に出てくるのは、この王が神の子であるということです。古代オリエントでは、エジプト人のもとでも、メソポタミアでも、王は受肉した神でした。本当はだれのことなのかを知らずに詩篇第2篇を読むと、この詩篇では、油注がれた者がエルサレムのシオンの山で王として立てられ、それによっていと高き方の子として養子にされます。つまり、それ以前はそうではなかったのです。詩篇第2篇における「生む」とは即位のことです。王座に着くことによって、王は神の子として養子にされるのです。

> 「わたしが、わたしの王を立てたのだ。わたしの聖なる山シオンに。」
>
> 私は主の定めを告げよう。主は私に言われた――「あなたはわたしの子、わたしが今日、あなたを生んだ。
>
> わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地の果ての果てまでをあなたの所有として与える。」

歴史上の状況とは違って、ここでは支配がユダやイスラエルだけでなく、すべての民に及んでいます。人々は世界支配を夢見ていたのでしょうか。

神の夢は、すべての民を比類のない一人の王のもとに一つにし、この王を通して全世界を祝福することです。それは、理想的な王の原像であり、来たるべき王の原型であるダビデから始まりました。どんな王でもよいのではなく、ダビデの子孫から、言い換えれば、ダビデの子から出る王です。王の部

族ユダから。詩篇第2篇は未来を見つめ、文字どおりの成就を待ち望んでいます。この詩篇は大げさな夢物語ではなく、成就した、そしてこれから完全に成就する、純粋なメシア預言です。使徒の働き13章32～34節が示しているように、私たちは今日、この詩篇の成就の中に生きているのです。

> 私たちはあなたがたに、父祖たちに与えられた約束について良い知らせを伝えています――神はイエスをよみがえらせ、その子孫である私たちにその約束を成就してくださったのです。詩篇の第二篇にも書かれているとおりです：
>
> 「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ。」
>
> 神がイエスを死者の中からよみがえらせ、もはや朽ちることのない方とされたことについては、こう言われました。「わたしはダビデへの確かで真実な恵みを、あなたがたに与える。」

ダビデへの確かな恵みとは、永遠の世界支配を始めることになる一人の子をダビデの王座に持つという、ダビデへの、したがってダビデが王であったその民への約束です（イザヤ書55章3節）。キリストにおいて、これは成就しています。イスラエルは実際、全世界にとって意味を持っています。ユダヤ人であり、ユダ族の出であるイエスが、今、天の御座に着いておられるからです。この方は成就であり、いや、さらに言えば、成就を超えた成就です。この方は子になるのではなく、人となられた永遠の神の御子だからです。神から生まれたこの方は、人としても神の御子であり、そのうえ復活においてそのような方として確証されました。

> ……神の福音。この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖さの霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。
>
> ローマ人への手紙1章1～4節

詩篇第2篇は、即位の儀式を描いています。福音書記者マルコはこれを取り上げ、自分の福音書の中で生かしています。詩篇2篇7〜8節の王の即位は、とりわけマルコの福音書1章11節と9章7節に映し出されていますが、ユダヤ人の読者がおそらく予想したであろう方向とは別の方向へ進み、それから15章39節で完成します。

詩篇第2篇	マルコの福音書
王への油注ぎと御霊の賜物　2篇2節、6節	王としてのイエスへの「油注ぎ」　1章11節
シオンの山での任職（王の即位）　2篇6節	イエス（とヨハネ）への神の語りかけ（天が裂ける）　1章11節と9章7節
諸国民への神の知らせ　2篇6節	神の子としてのイエスの任命　1章11節と9章7節
支配の正統化と王への権威の授与、王を神の子とする神の任命　2篇7節	ヘルモン山での変貌におけるイエスの栄光　9章2〜3節、7節
支配の委譲――エルサレムの王による世界支配　2篇8節	悪霊の追い出しと奇跡におけるイエスの権威
支配のしるしの継承（鉄の杖――土の器を打ち砕く）　2篇9節	イエスの杖とは、その福音の宣教である　1章14節（イザヤ書11章4節「その口の杖」に基づく）イエスの即位――ゴルゴタへの十字架の道――王座としての十字架　15章16〜19節、39節

この研究は、論文集『Christ of the Sacred Stories』（2017年、テュービンゲン）所収のネナド・ボジョヴィッチ（Nenad Božović）の論考に負っています。

マルコは、いちばん最初の節でこう書き始めます：「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。」キリスト、油注がれた方、この方は神の御子です！ついに、詩篇第2篇のメシアである歴史上の人物がだれなのかを言うことができるのです。けれども、マルコが描いているのは、どのようなメシアなのでしょうか。その線はまっすぐ十字架へと向かい、そこでは、ユダヤ人ではなくローマ人が、マルコの冒頭の告白に声を合わせます：イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように叫んで息を引き取られたのを見て、「この方はまことに神の子であった」と言った。（15章39節）

初めには、詩篇第2篇と同じように、父なる神がご自分の御子に語りかけ、御子について、本質的で、同時に計り知れない意味を持つことを宣言されます：すると天から声がして、「あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ」と言った（1章11節）。福音書の真ん中でも同じです：そのとき、雲がわき起こって彼らをおおい、雲の中から「これはわたしの愛する子、彼の言うことを聞け」という声がした（9章7節）。

イエスの上に御霊が降ったことは、詩篇第2篇の即位に照らして、「王としてのイエスへの油注ぎ」と見ることができます：イエスは、水の中から上がるとすぐに、天が裂けて御霊が鳩のようにご自分に降って来るのをご覧になった（1章10節）。ノアのとき、鳩はオリーブの葉をくわえて戻って来ましたが、それによって私たちは鳩を神の御霊と見なすことができます（オリーブ油＝聖霊による油注ぎ）。御霊が降ることによって、イエスは長く待ち望まれたメシアとして正統と認められ、権威を授けられます。それをなさるのは、父なる神ご自身です：わたしはわたしのしもべダビデを見出し、わたしの聖なる油を彼に注いだ（詩篇89篇20節）。さらにイザヤのことばが成就します：見よ、わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしが選んだ者――わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う（42章1節）。神とイエスとの関係は比類のないもので、愛と、互いへの慕わしさに満ちています。それは私たちの知っているあらゆる関係にまさり、神のひとり子としてのイエスの王権を、かつてない次元と豊かさで満たしているのです。

2篇8節で言われている王への支配の委譲は、マルコの福音書1章11節において、御霊と一つになることによって起こり、イエスの権威の中に現れます。イエスは「権威」ある者として教えられ（1章22節、27節）、その権威は悪霊の追い出しにも見て取れますが（1章24節）、それは詩篇2篇9節の王の権威に似ています。その権威はまた、イエスが現れると驚きと賞賛が起こること（1章27節）、イエスの働きの知らせが広まっていくこと（1章28節）、奇跡が増し加わること（1章29〜34節）にも見て取れます。

敵が土の器のように打ち砕かれる詩篇2篇9節の鉄の杖は、御霊に満たされたメシアの「その口の杖」について語っているイザヤ書11章4節と結びつけることができます。これをマルコの福音書1章1〜15節のイエスの即位に当てはめると、イエスの杖、王の笏として、「その口の杖」を理解することができます——つまり、イエスの笏とは、イエスによる福音の宣教なのです（1章14節）。

2篇8節では、諸国民が王の所有として約束され、王に世界支配が委ねられます。この約束をマルコの福音書1章11節の文脈で見るなら、どの民がイエスに所有として約束されたのか、そしてこの文脈で「地の果て」とは何を意味するのか、という問いが生じます。一つの答えはこうです：福音を告げ知らされ、それを受け入れるすべての民こそ、イエスの「所有」となる民です。福音は「地の果て」まで宣べ伝えられます。即位したメシア、イエスの所有となるこれらの民の最初の一員は、15章39節の、十字架のもとにいるローマの百人隊長です。

期待されていたように政治的な力が増し加わる代わりに、マルコにおける即位は正反対の方向へ進みます：メシアは政治的な力を求めません。弟子たちの前に立っているのは、苦しみを受けるメシアです。ヘルモン山での栄光の姿の前に、イエスは8章31〜33節で一度、ご自分の苦しみを予告され、栄光の姿の後にはさらに二度、9章30〜32節と10章32〜34節で予告されます。このことを念頭に置くなら、なぜマルコの福音書でイエスが決してご自分をメシアや神の子として名乗らず、いつも誤った期待を呼び起こさない別の言葉を用いておられるのかが理解できるでしょう。

15章39節におけるイエスの即位の最後の一歩は、前もっていくつもの箇所で準備されていました：まずイエスのエルサレム入城によって、ある女性が葬りのためにイエスに油を注いだことによって、それからピラトの前での審問において、そして最後に兵士たちがイエスをあざけったことにおいてです。11章1〜10節のイエスのエルサレム入城とろばに乗られた姿には、ダビデのらばに乗ってエルサレムに入ったソロモンの即位（列王記第一1章38節）との並行が見て取れます。それが、彼らがダビデの家の再興を期待していたこ

とを示す、11章10節の群衆の叫び「祝福あれ、われらの父ダビデの来たるべき国に」を説明しています。

受難において、イエスは扮装をさせられ、ヘレニズム時代の属国の王の小道具、紫の衣といばらの冠を着けさせられます。「ユダヤ人の王様、万歳」というあいさつは、支配者の前での通常の臣従のあいさつにあたり、「アヴェ・カエサル」に似ています。この場面全体が、王の儀式の風刺画として意図されているのです。イエスは葦の棒で頭をたたかれ、つばをかけられます。マタイの福音書27章29節によれば、その葦がイエスの右手に持たされ、こうして「王の笏」にされます。王の儀式をこのように戯画化することで、兵士たちはイエスをあざ笑い、正当な支配者であることを否定するのです。

ゴルゴタの丘に上ること（15章22節）は、イエスの即位と解釈することができます。こうしてこの場所はシオンと対をなす像となります。詩篇第2篇でシオンにおける王の即位が政治的な力を意味するのに対し、ゴルゴタの丘では苦しむメシア王が即位するのです。十字架そのものが、イエスがユダヤ人の王として死なれる王座を表しています。

神殿の幕が真っ二つに裂けたことは、すべての民に神への道が開かれたことを象徴しており、それは詩篇2篇8節の「国々をゆずりとして与える」という表現と関連づけることができます。この開かれは、イエスの死において起こります：御子が十字架につけられることによって、神はすべての民の前に啓示されるのです。

最後に、15章39節の百人隊長の告白が続きます。ユダヤ人の祭司長たちとは違って、百人隊長は信じるためにしるしを必要とせず、十字架のもとで信仰に至ります。十字架のもとでのみ、読者はイエスがだれであり、どのようなメシアであったかを理解することができるのです。こうして、マルコの福音書におけるイエスの即位は完成します。

詩篇第2篇とマルコの福音書をめぐるこの旅の終わりに、私たちには何が言えるでしょうか。旧約聖書と新約聖書の聖なる書物は、織り合わされた、破られることのない一つのまとまりをなしています。一方を持たずに、もう一方を持つことはできません。預言は神の現実なのです！

王は来られ、そして二度目に来られます。この方は私たちの王です。間もなく全世界が従うことになるこの呼びかけに、今ここで、無条件に、全世界の前で従いましょう。

11 恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ主の前で喜び叫べ。

12 御子に栄誉を帰せよ。主が怒って、あなたがたが誤った道で滅びることのないように――主の怒りはたちまち、あなたがたを焼き尽くす火となるからだ。幸いなことよ、主のもとに身を避ける人はみな。

永遠の契約としての、ダビデへの確かな恵み。

あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る子孫をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。……あなたの家とあなたの王国は、あなたの前でとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。

サムエル記第二7章12〜16節

1 なぜ国々は騒ぎ立つのか。なぜもろもろの民は、失敗に終わると決まっている計画を企てるのか。

2 この世の王たちは攻撃に備えて立ち、支配者たちは主と、主が油を注がれた王とに逆らって戦うために手を組む。

6 主は言われる。「このわたしが、わたしの王を立てたのだ。ここ、わたしの聖なる山シオンに！」

7 すると王は言う。「私は主の定めを告げよう――主は私に言われた、『あなたはわたしの子、わたしが今日、あなたを生んだ。

8 あなたの願いをわたしに言え。わたしはそれをかなえよう。わたしは国々をすべてあなたへのゆずりとして与え、地の果ての果てまでをあなたの所有とする。』」

10 だから今、王たちよ、悟れ。地をさばく者たちよ、警告を受けよ！

詩篇2篇

ダビデの詩篇。

主は私の主に言われた。

「あなたは、わたしの右に座していなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」

主はあなたの力の杖をシオンから伸ばされる。あなたの敵のただ中で治めよ。

詩篇110篇1〜2節

王の詩篇における油注がれた者：2篇2節、20篇6節、84篇9節、89篇38節、132篇10節

21 王の贈り物

イエスは約束しておられました。ご自分が去るとき、もうそこにおらず、弟子たちが自分なしでやっていかなければならないとき、御霊を遣わす、と。ご自分の代理として。それが聖霊です。この御霊はイエスとあまりにも一つであり、イエスとあまりにも同一なので、イエスは、ご自分が彼らのところに来るのだと言うことができます。この御霊は、イエスと同じように神であり、どこにでもおられる人格です。遍在しておられます。冠を授けられた主であり王であるイエスは今、この御霊によって、ご自分を愛するすべての人のもとに直接おられます。つまり、イエスを信じ、イエスに従う人々のもとにです。

御霊が贈られたこの日のためにも、今日まで祝日があります。週末まるごとです。この歴史的な出来事はペンテコステと呼ばれます。それはユダヤ教の祭りです。イースター、つまりイエスの復活からペンテコステの祭りまでは五十日あります。四十日後に、イエスは天に上られました。その十日後、イエスはエルサレムで祈っている弟子たちの上に御霊を贈り、遣わされます。

それは、天の世界での十日間の戴冠の祝いと王の即位を意味します。天とその住人たちは歓声を上げます。御子が帰って来て、世界を救うためになすべきことを成し遂げられたのです。それは祝われなければなりません。そして報いられなければなりません。父は御子に――最高の栄誉の座のほかに――聖霊を贈られます。

この御霊は今や、王の手であり目です。全地に遣わされています。御霊がおられるところに、キリストがおられます。御霊はどこででも働いておられます。捜し、助け、解放し、照らし、災いを防ぎ、不正が際限なくはびこったところでは、さばきももたらします。

この御霊によって、メシア王であるこの方は治めておられます。この方の支配は現実です。この方に忠実な人々のあいだで。この方の王国において。その王国は――王がまだ戻って来られないあいだは――目に見えません。政治

的には、この世の大物たちが支配しているからです。イエスに忠実な人々は、しばしば抑圧されています。迫害されることさえあります。彼らは、かつてのイエスご自身と同じように、苦しむ王国に属しているのです。

王が遣わし、贈ってくださった神の御霊は、この方が王であり、いと高き方であり、死者の中から最初に生まれた方であることの証拠です。この方は今、復活した人として、来られる前に、そして世界が存在する前に持っておられたすべての威光と神の豊かさを、再び受けておられるのです。人となられたとき、この方はそのすべてを後にしてこられたのでした。自ら進んで手放されたのです。まさにこの栄光を、キリストの御霊が地上で証しし、確証しておられます。とりわけ、人々がそれを求めて手を伸ばしているところで。

この生ける神の御霊——あるいはメシアの御霊——は、この方を地上の弟子たちと固く結びつける絆です。距離は、この一致と交わりの妨げにはなりません。人々が福音を聞いて心を動かされるところではどこでも、御霊はメシア王を証しされます。

御霊は、弟子たちが王に忠実であるための力です。御霊は彼らの導き手、彼らのコーチ、彼らの弁護者、助け主です。

この御霊について、冗談を耳にすることもあります。説明のつかない、しかしまったくどうでもいい現象が起こると、その原因は御霊だというのです。いわば幽霊のようなものとして。大切なのは、この御霊が休みなく働いておられるということです。神の、限りない可能性をもって。人々が個人的に王に出会うために。そして、王の国へと家に帰って来るために。その国はすべての人に開かれています。特に招かれているのは弱い人たちです。疑う人たち。すべてを完全にだめにしてしまった人たち。自分が罪人だと知っている罪人たち。そして、自分も同じようにこの方を必要としていることをまだ知らない、善良な人たちもです。

この神の御霊、このキリストの御霊は、イエスの心と父の心をもって、世界の救いに関しては最前線で働いておられます。もし目に見えないものを特別な眼鏡を通してカラーで見ることができたなら、私たちは途方もなく驚くこ

とでしょう。他方で、もしこの御霊が王から贈られていなかったら、私たちの世界がどうなっていたかは想像もつきません。

だから、神の書にこう言われています。「彼はいと高き所に上ったとき、捕らわれの身そのものを捕らえ、その代わりに人々に贈り物を与えた。」

「彼は上った」という言葉は、何を意味しているのでしょうか。それは、彼が地のいちばん深い所に下ったということでもあるのです！

下った方は、すべての天の世界よりはるかに高く上った方と同じ方です。こうして、この方は宇宙を余すところなく満たしておられるのです。

エペソ人への手紙4章8〜10節

ヨハネの福音書14章18節、28節、16章4節、7節、使徒の働き1章5〜8節、2章、5章32節、ヨハネの黙示録1章4節、5章6節、コリント人への手紙第二3章17節

22 恵みを施す与え手であり、賜物である王

古代における良い理想的な王は、恵みを施すことで際立っていました。もちろん、それによって敬意と、忠誠のような見返りを求めるためでもありました。当時は、そういう仕組みだったのです。古代の理想的な王とは、臣民の幸福のために尽くす、気前のよい恩人です。王はとりわけ、これ見よがしの施しによって治めていました。もしかすると、それは現実というより決まり文句だったのかもしれません。

イエスはキリスト、王なるメシア、ダビデの血筋から出た油注がれた王です。ですから、キリストについて語られるところでは、王というモチーフが多かれ少なかれそこにあります。イスラエルと全世界の王として。

ローマ人への手紙は、いくつもの箇所で王というモチーフを用いています。パウロはその土台を、冒頭の1章3〜4節ですぐに据えています。

> ……神の福音を宣べ伝えるために。この福音は、神がその預言者たちを通して聖書の中ではるか前から約束しておられたものであり、御子についての福音です。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖さの霊によれば、死者の中からの復活以来、力ある神の子として立てられた方、私たちの主イエス・キリストについての福音です。

パウロはその後、繰り返しこれに立ち返り、その上に積み上げていきます。手紙の結びもまた、王として治め、諸国民が望みを置くことになる方です（ローマ人への手紙15章7〜13節）。この方の苦しみといけにえとなる覚悟は、神の真実を黙らせておくことができません：神はこの方に王座を与えることによって、宇宙の支配をお与えになるのです。始まりの時のアダムの支配は、不従順と罪と死によって特徴づけられています。それに対してキリストの支配は、従順と義といのちによって特徴づけられています。死はこの方を捕らえておくことができず、この方は神の栄光によってよみがえらされ、今や神の右に即位しておられます。パウロの抱く王の理想像はまさに綱領の

ようなもので、それはローマ人への手紙5〜8章と手紙全体における、メシアをめぐる対話なのです。

ローマ人への手紙5章1〜11節は、それまでに語られたすべてのことの要約であり、同時に、その後に続くことの土台です。この箇所は、1節と11節で、どちらも「私たちの主イエス・キリストによって」という言葉で枠づけられています（手紙全体が1章1〜7節と15章7〜13節のあいだで王として枠づけられているのと同じです）。このパウロの箇所は、王の恩恵、あるいは王の施しという視点から見ることができます。そうすると、この箇所に特別な光が当てられます。最初の読者たちも、おそらくそのように理解したでしょう。

王の比類のない賜物は、その従う者たちを解放し、力づけ、守ります。キリストとその民の場合も同じです。

理想的な王は、その民や町に平和と和解をもたらしました。こうして私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。王なる恩人であるこの方によって、私たちは神に近づくことができます。王の私室に近づくことができるのです。そこで私たちは住民として迎えられ、24時間、年中無休でそこに住むことが許されています。ふさわしくない者、名もなく取るに足りない者、あるいは敵にとって、このように入って行けることなど、あらゆる可能性からかけ離れたことでした。

パウロはメシアを、いけにえをささげる方として描いています。古代の王たちもそうしていました。けれども、このいけにえは、ご自分のいのちをささげるという、この方ご自身なのです。王が戦争で自分の民のために身をささげること、あるいはその覚悟があることは、ありえました。いずれにせよ、王はそれを臣民に、とりわけ兵士たちに期待していました。

けれども、古代の恵み深い王のあらゆる通常の型を後にしているのは、ここでだれがその恵みを受けるのかということです。王の恵みにあずかったのは、まさに正しい人やふさわしい人や名誉ある人ではありません。ここでは、罪人、敵、死に値する者たちなのです。それこそが大きな驚きです。王が自分の敵のために死に、しかも古代で知られていたように、彼らが自分に仕えることを期待することさえできないのです。古代では、贈り物は、どん

なかたちであれ、見返りを受けることを期待して与えられたからです。少なくとも、施しとはそういう仕組みでした。

苦しみというテーマも、この王をめぐる対話の中で取り上げられています。王の賜物は、ふつうなら苦しみを終わらせることを意味するでしょう。けれども、ここでは苦しみは残ります。それはメシアによる神の国の栄光に満ちた未来において、初めて最終的に終わるからです。苦しみの中で耐え忍び、苦しみを誇ること、それは王に対する、私たちのキリストに対する忠誠の表し方なのです。

1 こうして私たちは今、信頼に基づいて義とされました。それによって私たちは、私たちの主、メシアであるイエスによって、神との平和を持っています。

2 この方によって、私たちは信頼に基づいて、今や神の恵みというこの経験にも自由に近づくことができます。私たちはその中にしっかりと立ち、神のすばらしい栄光への希望に、誇りに満ちて頼っているのです。

7 人がほかの人のために、正しい人のために死ぬことは、めったにありません。そうです、本当に良い人のためなら、死ぬことをあえてする人もいるかもしれません。

8 しかし神は、私たちがまだ律法に背く者であったときに、メシアが私たちのために死んでくださったことによって、私たちに対するご自分の愛をはっきりと示されたのです。

10 なぜなら、こういうことだからです。私たちがまだ神の敵であったとき、神は御子のいけにえの死によって私たちをご自分と和解させてくださいました。そうであれば、今こうして神と和解させられている私たちは、なおさら御子のいのちによって救いを経験するのです。

11 それだけではありません！私たちは、私たちの主、メシアであるイエスによって、誇りに満ちて神を語るのです。この方によって、私たちは和解させられたのですから！

ローマ人への手紙5章1〜11節

また、神の書の別の箇所ではこう言われています。「諸国の民よ、主の民とともに喜べ！」

また別の箇所では、「すべての国々よ、主なる神をほめたたえよ。すべての民よ、主を賛美せよ！」

預言者イザヤもこう言っています。「本当はエッサイの根源である方が立ち上がり、諸国の民を治める。そうだ、諸国の民はこの方に望みを置く！」

ローマ人への手紙15章10〜12節

23 王の富

王は豊かです。ふつうはそうです。大きな財産を持っています。けれども、過ぎ去っていく世界で、富とは何でしょうか。そして、自分の民から奪い取ったものなら、富に何の価値があるでしょうか。少数の人だけが豊かで、多くの人が貧しいなら。

メシア王イエスは神の御子です。この方はすべてを受け継ぐ相続人です。宇宙全体を。存在するすべてのものを。それはこの方のものです。

富とは、物質的な財産だけではありません。人が貧しくも豊かにもなりうる、倫理的・道徳的な資質もあります。善良さ、恵み、愛と正義、真実と親切、寛大さと知恵は、人が王に望む美点です。イエスは人としてそれを生きられました。これらの特質は、この方の中にとどまっています。いと高き方となっても、この方は福音書が描いているとおりの方であり続けておられます。

権力と富は、しばしば人を変えてしまいます。いつも良い方向にとは限りません。イエスは昨日も今日も、永遠に同じ方です。私たち人間にとって、それは良い知らせです。変わらないものです。私たちにとって、頼ることのできるものです。

この方の栄光の富は、金や銀や暗号資産にまさります。この方の富は、死とはかなさの向こう側にある新しい創造です。

この方が、ご自分が死んでくださった人々、忠実に従う者としてこの方に身をささげている人々を、ご自分の富と見なしておられると読むと、心を打たれます。ご自分の大切な所有物として。正直に言えば、人こそ最大の富です。人は私たちの人生を豊かにします。人がいなければ、私たちは貧しいでしょう。

イエスは豊かにしてくださいます。この方は、ご自分のすべての富を、ご自分の栄誉の座を、この方のものになりたいと願うすべての人と分かち合って

くださいます。聖書のことばにあるとおり、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みがどのように示されたかを知っています：この方は富んでおられたのに、あなたがたがこの方の貧しさによって富む者となるために、あなたがたのために貧しくなられたのです。

良いものについて言えば、私たちは、あるいは私たちのほとんどは、差し出せるものをあまり持っていません。正直に認めましょう：私たちは物乞いです。そしてこの方は、貧しい者となられた王です。マーク・トウェイン（Mark Twain）の『王子と乞食』は、王の息子エドワードが、物乞いの少年トムと服を取り替える見事な物語です。エドワードは手違いでトムだと思い込まれ、物乞いの生活を送ることになります。弱いたとえですが、それでも的を射ています。イエスは天の栄光、永遠の輝きを後にされます。それにしがみつくことはなさいません。自ら進んで、私たちのところに届くために、そのすべてを手放されます。この方がどれほど本気であるかを、私たちがすぐそばで見て聞くことができるように。私たちが豊かになることこそ、この方の目的でした。

今、この方は来られたところに再びおられます。持っておられたものすべてを、この方は取り戻されました。今度は人として。それを人々と分かち合うことができるように。この方の富とは、この方ご自身の栄光、主の栄光（ドイツ語で HERRlichkeit——「主（HERR）」と「栄光（Herrlichkeit）」を掛けた言葉）です。この方の聖さもそうです。預言者イザヤは、身震いさせられるような幻を見ました。彼は、主が高く上げられた御座に着いておられるのを見ます。御使いたちがこの方を取り囲み、仕えています。御使いたちは、御座に着いておられる方について、こう言い表します：聖なる、聖なる、聖なる！イザヤはあまりに恐れおののいたので、こう言います：ああ、私はもうだめだ、私は罪深い人間だ。私の目が、本来は見ることのできないものを見てしまったからだ：私の目が、王である万軍の主を見たのだから。

メシア王は小羊のようです。けれども同時に、獅子のようでもあります。この方の栄光は、荒々しく、飼いならされず、恐ろしいものですが、同時に、愛に満ち、柔和で、優しいものでもあります。神とそのキリストは、私たち

にとって奥義であり続けます。この方は、私たちが考えうるよりも大きな方です。恐れる必要はありません。けれども、畏れは必要です。イザヤの罪は赦されました。イエスがご自分の血で私たちを清めてくださるなら、私たちはこの方の光の中で生きることができます。全き愛は恐れを締め出します。

この方の富は私たちの富です。この方は、ご自分の民のこととなると、気前がよいだけでなく、惜しみなく与えてくださいます。さあ、この富を知りに出かけましょう。税を取り立てるのではなく、ご自分の国のすべての住民に贈り物をくださるとは、なんという王でしょう！

主よ、あなたに並ぶ者はいません！あなたは力ある方、その強さで知られた方です。諸国の民の王よ、だれがあなたを恐れず、あがめずにいられるでしょう。この世のすべての知恵ある者たち、すべての王たちの中にもあなたに並びうる者はいないのですから、それはあなたにふさわしいことです。

エレミヤ書10章6〜7節

詩篇50篇10節、ヘブル人への手紙1章2節、13章8節、コリント人への手紙第二8章9節、イザヤ書6章1〜7節、ヨハネの福音書17章22節、エペソ人への手紙2章6〜7節

24 私たちの王――仲介者でありとりなし手

王は、神々と人間のあいだの仲介者と見なされていました。それが古代の世界観であり、信仰でした。王の仲介者としての役割は、最高位の祭司という職務に表れていました。アウグストゥスとその福音については、すでに聞きました。彼は、ポンティフェクス・マクシムス（Pontifex maximus）の称号を引き継いだ最初の皇帝であり、それによって皇帝として宗教の首長にもなったのです。

ポンティフェクス・マクシムスの称号は、もともと古代ローマの神々の祭儀の最高の守り手を指していましたが、その後ローマ皇帝たちに受け継がれました。この時代、政治と宗教は固くかみ合っていました。こうして、バベルのニムロデからエジプトのファラオたちに至るまで、宗教と政治は一つの手に握られていたのです。

ポンティフェクスとは橋を架ける者という意味です。彼は神々の世界とのつながりを保っていました。

これらすべての職務と栄誉ある役職が、キリストであるイエスにおいて完全なかたちで一つになっています。この方は、古い契約のアロンの祭司職の終わりであるだけではありません。ローマ人やほかの諸国民のもとで当たり前であり、どこにでもある日常の信仰であった、祭司の務めといけにえの務めを伴うあらゆる神々の祭儀の終わりなのです。

ご自分の民を神へと導いたのは、キリストです。大祭司として、言うならばポンティフェクス・マクシムスとして、ご自分の民のために神のもとで尽力しておられるのは、この方です。この方は私たちのためにとりなし、私たちのために神の祝福と助けを願ってくださいます。この方は王なる祭司として、天の聖所からご自分の民のもとに出て来て、私たちに祝福をもたらしてくださいます。

この方は、ほかのだれにもできないように私たちのために尽力してくださいます。この方は私たちを理解し、私たちの心と思いを知り、私たちに何が欠けているかを知っておられ、それらすべてとともに私たちを、いと高き方の御座へ連れて行ってくださいます。だから、私たちはこの方のもとで最も安全なのです。この方は神と人との仲介者です。十字架で流された血によって、神との関係を回復し、平和をつくり出してくださったのは、この方なのです。

イエスはレビ族の出ではなく、アロンの家系にも属さず、王の部族ユダから生まれたので、神は新しい祭司の位を備えられました。神はそれを、アロンの祭司職よりはるか前に準備し、あるいは可能にしておられました。今やキリストは、メルキゼデクの例に倣う祭司です。メルキゼデクはアブラハムの時代に生き、信じる者の父であるアブラハムに出会いました。彼はサレムの王であり、いと高き神の祭司でした。つまり、一人で王であり祭司でもあったのです。この「二重の役割」において、彼は主イエス・キリストのひな型です。主イエス・キリストは、永遠の祭司であり王として、神によって立てられています。

しかしイエスは永遠に存在されるので、変わることのない祭司職を持っておられます。それゆえ、イエスはご自分によって神の臨在に来る人々を、何の制限もなく救うことがおできになります。イエスはいつも生きていて、彼らのために絶えずとりなしておられるからです。

ヘブル人への手紙7章24～25節

ペテロの手紙第一3章18節、ヘブル人への手紙2章17節、4章14～16節、5章5～10節、7章25節、8章6節、9章15節、12章24節、ローマ人への手紙8章34節、テモテへの手紙第一2章5節、創世記14章、詩篇110篇4節

（歌詞はドイツ語の原文のまま）

Heilig, Heilig, das Lamm Gottes

Das geopfert ist

Lob und Ehre, sei Dir dem König

Auf dem Gnadenthron

Die ganze Schöpfung singt und

Preist dich, den König

Du bist mir alles Herr

Und ich will dich ehren

作詞：アンヤ・レーマン（Anja Lehmann）

25 王の知恵

民にとって、その王はすべての人の中で最も知恵ある者でした。たとえそれがただのうわさにすぎなくても。王はまた、その民の最高の裁き手でもありました。最後の言葉は王が持っていました。王の判決は人々に結果をもたらしたので、それは真実で正しく（公正で）なければなりませんでした。

昔、二人の女がソロモン王の前に立ちました。彼女たちは生まれたばかりの子をめぐって争っていました。それぞれが子を産みました。一人の子が死にました。死んだ子の母親は、ひそかに死んだ子を生きている子と取り替えました。だまされた母親はすぐにそれに気づきます。けれども、遺伝子検査もなしに、どうやってその欺きを証明できたでしょう。その場にいなかったソロモンは、証人もいないのに、どのように裁けばよかったのでしょうか。ソロモンは剣を取り、赤ちゃんを二つに切ろうとします。それぞれの女に半分ずつ。女たちの反応から、ソロモンはだれが本当の母親かを見抜きます。本当の母親は、たとえ欺いた女が子を得ることになっても、子を助けたいと願います。けれども、もう一人の女は、子が殺されてもかまわないのです。驚くべき知恵です。ソロモンは神に、富や権力ではなく知恵を求めていました。それが彼に与えられたのです。近くからも遠くからも、人々は彼に助言を求めにやって来ました。

イエスはあるとき、つい読み過ごしてしまいそうなことを言われました。「彼女は――シェバの女王は――ソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たのです。しかし見なさい、ここにソロモンにまさるものがいます！」イエスは、その知恵によって人々に強い印象を与えました。この方が語り、説教されると、別の世界が開かれました。律法学者たちの世界とは違う世界です。知恵の御霊がこの方を通して語られました。この方の知恵は天からのもので、清く、素朴な人々のためのものでした。人々の頭上を通り過ぎていくような、高みにある知恵ではありませんでした。この方の言葉は、最も澄んだ泉の水のようでした。さわやかで、生き生きとさせ、清めるものでした。

メシア王キリストにおいて、私たちは神の知恵に出会います。その知恵は、私たち人間に心を向けています。私たちが出口のない危機の中にいるからです。この方の知恵が、私たちを引き受けてくださいます。そして自由へと導いてくださいます。まことの出エジプトです。王が私たちを連れ出してくださいます。王は道を知っておられます。使徒パウロが言うように、この方のうちに、知恵と知識のすべての宝が隠されています。この方のもとにいること、この方に聞くことは、人が下すことのできる最善の決断です。

知恵とは、知識と経験を日々の生活に生かし、良い決断をする力です。すべての人にとって良い決断です。未来につながる決断です。たとえ今日、それが痛みを伴う削減や断念を意味することになるとしても。

私たちは政治家たちに知恵を願います。私たちの王の名によって、彼らを知恵で祝福します。彼らの務めは、特権というより挑戦です。統治する者たちが国民を困難な時代に導いていくために必要な、最善の解決策、答えを持っているのはだれでしょうか。私たちの政治家たちにも天は開かれていて、ソロモンの願いを繰り返すことができます。

知恵が欠けていると感じている人は、この王、あらゆる時代の最も知恵ある王に、それを求めてください！この方は、求める人にはだれにでも喜んで与えると言っておられます。とがめることなしに。私たちが認める失敗や罪は、この方にとって、知恵を出し惜しみする理由にはなりません。

ご自分の知恵を惜しみなく分け与え、自分だけのものにしておかないとは、なんという王でしょう！この方から学びましょう。知恵は知識以上のものです。それは王のそばで生きる生き方です。地が存在する前から神とともにあった知恵と呼ばれる方との交わりの中で生きることです。この主を畏れることは知恵の初めです。

しかし、上からの知恵は、まず第一に清く澄んでいます。次に平和を愛し、優しく、譲ることを知っています。あわれみに満ち、多くの良い行いを生み出します。偏見も偽りもありません。

ヤコブの手紙3章17節

列王記第一3章5〜10節、16〜28節、5章、ルカの福音書11章31節、コロサイ人への手紙2章3節、マルコの福音書1章22節、箴言1章7節、8章22〜30節、コリント人への手紙第一1章30節、ヤコブの手紙1章5節、3章13〜17節、ヨハネの黙示録5章12節

（歌詞はドイツ語の原文のまま）

EIN KÖNIG VOLLER PRACHT,

Voll Weisheit und voll Macht.

Die Schöpfung betet an, die Schöpfung betet an.

Er kleidet sich in Licht. Das Dunkel hält ihn nicht

Und flieht, sobald er spricht, und flieht, sobald er spricht.

So groß ist der Herr, sing mit mir.

So groß ist der Herr.

Ihn preisen wir.

So groß, so groß ist der Herr.

Von Anbeginn der Zeit bis in die Ewigkeit

Bleibt er derselbe Gott, bleibt er derselbe Gott.

Als Vater, Sohn und Geist, den alle Schöpfung preist,

Als Löwe und als Lamm, als Löwe und als Lamm

作詞：アルネ・コプファーマン（Arne Kopfermann）

26 イエスの王の律法

古代ギリシア人にとって、そしてユダヤ人にとっても、良い王とは良い法を定める者でした。そして、自らもそれを守る者でした。イエスが王であるなら、この方はどのような法を定められたのでしょうか。この方は立法者だったのでしょうか。イエスは、いわゆる山上の説教で次のように言われて、同時代のユダヤ人たちに衝撃を与えました。

> 「『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います：自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい――あなたがたの父の子どもになるために。天におられるその父は、ご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるのです。」

ローマ人を愛せと？それはとんでもないことです。それはすべてをひっくり返します。敵を愛せよと命じることと、それを自ら生きることとは別のことです。イエスの受難の物語は、この方がご自分の戒めを自ら守られたことを証明しています。この方が願えば、イエスを救うために十二軍団の御使いが控えていたはずなのに、この方は救い出されることを断念されます。この方は抵抗なさいません。十字架の上での死の時に、この方はご自分を責めさいなむ者たちのために祈られます。

> 父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているのかが分かっていないのです。

メシア王は、律法が身をとったものでした。この方はロゴス、つまり神のことばでした。いわばご自分の王国の宣言である山上の説教の中で、この方は、敵を愛することが天の父の本質であることを示されます。そして、これまでもずっとそうであったことを。この方は愛の戒めだけでなく、敵を愛することの戒めも生きられました。この方のように行動することが、この父の

息子や娘となるための前提です。ひとり子、神の副王は、この父の本質を体現しておられます。愛は、ご自分の御子を愛しておられる父の王国の鼓動です。そして父は、この愛をご自分の国の基準とされるのです。

王として、イエスはご自分の民に新しい戒めを与え、自ら手本を示されました。

> 「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

イエスの肉の兄弟ヤコブは、それを理解して、こう書いています。

> もし本当にあなたがたが、聖書に従って、「あなたの隣人を自分自身のように愛せよ」という王の律法を守るなら、あなたがたの行いは立派です。

この王は、ご自分が語り、求めたことを、徹頭徹尾生きた方でした。立法者である権利を見せつけるためだけの、気まぐれな戒めではありません。この方の戒めは無条件の愛です。それは敵意を打ち負かし、ほかの何にもできないほど人を変えることができるのです。

この方の王国では、この方の律法が通用します。いつでも。それが守られないところには、この方の国はありません。そして、この戒めを守らない人は、この国に属していません。

キリスト、メシア王の律法とは、互いの重荷を負うことです。それは自由の律法です。つまり、自由にする律法です。私たち自身から。そして、もしかすると隣人をその重荷から。王が私たちの重荷を取り去って、それを私たちのためにしてくださったように。

だれが、このような王を持ちたいと思わないでしょうか。

さて、聖書に記されているとおり、「あなたの隣人を自分自身のように愛せよ」という王の律法に本当に従うなら、あなたがたは良い正しい行いをしているのです。

ヤコブの手紙2章8節

マタイの福音書5章43〜48節、26章53節、ルカの福音書23章34節、ヨハネの福音書1章1〜3節、コロサイ人への手紙1章13節、ヨハネの福音書13章34節、ヤコブの手紙1章25節、2章8節、12節、ガラテヤ人への手紙6章2節

27 王の命令

王は望みを口にしますが、それは命令として受け取られます。王は臣民に務めを命じます。臣民は、王が求めることをできるかぎりよく果たします。イエスは天に上られるとき、弟子たちに一つの命令を与えられました。

> 「イエスを見ると、彼ら（弟子たち）はイエスの前にひれ伏したが、疑う者たちもいた。イエスは彼らに近づいて来て、こう言われた：
>
> わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。
>
> ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々をわたしの弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。
>
> そして確信していなさい。わたしは世の終わりまで、毎日あなたがたとともにいます。」

実際、ここに立っておられるのは天と地の王です——ほかにだれが、地においてだけでなく天においても、すべての権威を持っているでしょうか。けれども、この方はこの力を、地の王たちや国々を服従させるためには用いられません。そうではありません。敵を愛せよという戒めを出す方は、人々を勝ち取りたいのです。強いるのではありません。この方はご自分の力を、すべての民が、この方がだれであり、どのような方であるかを知るようになるために用いられます。

結局のところ、この方の力と権威はすべてを包み込み、現実のものです。この王は、この惑星の歴史をいつの日にでも終わらせることがおできになります。世界に、ご自分の力と支配を見せつけ、感じさせることもおできになるでしょう。独裁者たちはそうします。この方の支配は違います。この方の律

法は自由の律法です。人々は確信をもってイエスに従い、この方をあがめるべきなのです。

王の夢は、すべての人がこの方を知り、この方の弟子となることです。ほかのどこでも得ることのできないもの、すなわち恵み、赦し、永遠のいのち、自由、安らぎを、彼らに与えるためです。

人々は、自分たちのためにおられるこの王を、どのようにして知ることができるのでしょうか。すべての弟子には、人々をこの王のもとに導く特権があります。一度、文字どおりに想像してみましょう。一方では、宇宙の王の好意を受け、この方を個人的に、それどころか私的に知り、24時間年中無休で、いつでも途切れることなく謁見が許されている。そして、それについて尋ねる人や、私たちを通してそれを知った人をみな、連れて来ることが許されている。彼らを王のもとに導くことが！そして、彼らがみな、王のもとで大歓迎されることを知っている。王はだれのことも待っておられるからです。

それでもまた、こうも問えます：このメシア王イエスは、どのようにして世界をご自分の所有として要求されるのでしょうか。良い知らせを携えた使者たちを世界に送り出すことによってです。彼らは真の王を宣べ伝え、それによって信仰の従順を宣べ伝えます。ですから、福音は、従うべき命令のようなものでもあるのです。メッセージは明らかです：この世の皇帝とその命令には、人は服従を尽くします。主イエス、主の主、すべての王の王には、人は従うのです。たとえイエスが見えなくても、皇帝以上に。だからこそ、私たちの忠誠と真実を表す言葉は「信仰の従順」なのです。

この命令は果たされてきましたし、今も果たされています。それは最終段階にあります。多くの人がこの王について聞きました。王を知らせるために、自分のことを顧みず、最も遠い地域にまで出て行った多くの人々のおかげです。それは小さく始まりました。弟子たちの勇気が世界を変えました。彼らは、だれが自分たちの後ろに立っておられるかを知っていました。そして今日、イエスに従い、イエスを告白するすべての人の後ろに立っておられる方を。すべての権威を与えられた方です。

彼らはだれも恐れる必要はありません。生きるときも死ぬときも、最後の言葉を持っておられるのは王です。

この本は、王のもとに来るようにという招待状です！王を告白するようにという招待、あるいは思い起こさせるものです！この王のもとでは、何度でも新しく始めることができます。赦し、恵み、自由が、この方の国の法なのです。

すべての王が彼の前にひれ伏し、すべての国々が彼に仕える。

彼は、助けを叫び求める貧しい者たちの救い主となり、苦しんでいて助ける者のいない人々の救い主となるからだ。

彼は弱い者や貧しい者をあわれみ、困窮している人々のいのちを救う者となる。

抑圧と暴虐から、彼は彼らを贖い出す。彼らのいのちは、彼の目に尊いからだ。

王よ、とこしえに！

詩篇72篇11〜15節

マタイの福音書28章16〜20節、テモテへの手紙第一2章4〜5節、ローマ人への手紙1章15節、5章2節、16章26節、エペソ人への手紙2章18節、3章12節、使徒の働き17章30〜31節

28 王のために――信仰と真実

この王に仕えることは大きな栄誉です。この方に真実を誓うことは。この方は、私たちをご自分のものとするにふさわしい方です。この方ご自身のいちばん大切な所有物として。

私たちは、だれに自分の人生をささげているでしょうか。まったく意識して、あるいは気づかないうちに、私たちはだれに、あるいは何に忠実なのでしょうか。どんな偶像が私たちを支配しているでしょうか。私たちはだれのものでしょうか。私たちにとって何が聖なるものでしょうか。私たちは、だれに自分を明け渡してしまっているでしょうか。私たちの時間は？私たちのお金は？私たちの関心は？

ソーシャルメディア？フェイスブックやインスタグラム？宗教心？評判？虚栄心？スポーツ？自己中心？食べること？アルコール？ニコチン？財産？お金？権力？セックス？成功？キャリア？

問題は、これらのもの、あるいはそのいくつかが、良いか悪いか、聖なるものか罪深いものか、ということではありません。決定的なのは、それらが私たちの人生でどんな役割を果たしているかです。すべての人への問いです。王に仕えている人、あるいは仕えようとしている人への問いです。あるいは、王の名前しか知らない人への。そして、王を知らず、王がだれで、どのような方であるかを知らない人々への問いです。

王は、その職務の力によって、真実と従順を求めます。ただ同意するだけの信仰、何かを本当だと思うだけの信仰は、死んでいます。そういう信仰は、王とのつながりを生み出しません。信仰の従順こそ、王が私たちを呼んでおられるものです。王の望みは私たちへの命令です。この王に従うなら、それは全面的にでなければなりません。中途半端は、ここでもまったくうまくいきません。

この方の側に立つことが私たちにどれほどの犠牲を求めようとも、それは今も、これからも正しい側です。まず私たちのためにすべてを懸けてくださった勝利者の側です。私たちの真実は感謝です。私たちの献身は私たちの務めです。自発的に、強いられることなく。一人のツァラアトの人が感謝して戻って来ましたが、癒やされたのは十人でした。このような生き方には最善の未来があります。今日それは、この地上の生活において、私たちの王を無視する人々に比べて特別な利点がないということを意味します。この王なしの人生のほうが、簡単で楽なこともありえます。だからこそ、イエスは、ご自分に従う前に費用を計算すべきだと言われるのです。

イエスが言われるように、従うとは、自分の十字架を負うことです。つまり、自分をほかの人々にゆだね、彼らのためにそこにいることです。自分ではなくほかの人々を、人生の第一の場所に置くことです。イエスの生き方を手本とすることです。本当に愛し、仕えることです。

ちなみに、このイエスに従う歩みは、しばしば浮き沈みがあります。決して完全ではありません。うまくいくこと、成功することばかりではなく、同じように敗北や、自分自身への失望もあります。疑いや答えの出ない問いもあります。まさに信仰による生き方です。見ることによるのではありません。それは時期によっては、まったく厳しい挑戦となります。

信仰と真実（ギリシア語でピスティス、ラテン語でフィデス）は、ローマ社会では、互いの、変わることのない忠誠を意味していました。フィデスは社会を一つにまとめていました――責任と忠誠、与えることと受けること、信頼性と真実が、この言葉の中に一つになっています。最高の位置にあったのは皇帝への忠誠で、皇帝もまた自分の民に対して忠誠を尽くしていました。主イエスに対する真実こそ、キリスト者であることを形づくるものです。

この真実は、またそれに伴いうる不都合や苦労や断念や迫害は、報われるのでしょうか。イエスは、そのような生き方には、すでにこの地上で、つまり神の未来が始まる前に、喜びと祝福があると言われます。けれども最後には、あらゆる苦労の報いとして永遠のいのちがあります。王とともに生きる、言葉にできないほど美しく、深く、守られた、満ち足りた、豊かな生活

です。やがてそれは、この方の永遠の王国において、現実の、目に見えるものとなるのです。

次に引用する歌詞は、懐古趣味ではありません。ましてやロマンチックなものでもありません。また、イエスに従う人々や王に忠実な人々の生活の現実を、百パーセント描いているわけでもありません。むしろ、祈り、願い、目標なのです。

（歌詞はドイツ語の原文のまま）

Ein Leben gegeben für den Herrn der Welt

Ein Leben gegeben für das, was wirklich zählt

Ein Leben für Gott, für ihn allein, das soll mein Leben sein

ルーカス・ディ・ヌンツィオ（Lukas Di Nunzio）



コリント人への手紙第一6章12節、ヨハネの手紙第一5章21節、ルカの福音書16章13節、ルカの福音書14章25～33節、17章11～19節、マルコの福音書10章28～31節、マタイの福音書25章21～26節、エペソ人への手紙1章1節、コロサイ人への手紙1章7節、4章7節、ヨハネの黙示録2章10節、13節、17章14節

（歌詞はドイツ語の原文のまま）

Für den König, für den Herrn

Für ihn geben wir uns hin

Seine Ehre unser Ziel

Nichts bedeutet uns jemals so viel

Für den König, für sein Reich

Alle Menschen sind hier gleich

Lamm und Löwe sind vereint

Und das Licht der Gerechtigkeit scheint

Alle Ehre König Jesus

Unsere Herzen, sie fliegen dir zu

Wir erheben deinen Namen

Der allein wahre König bist du

アルベルト・フライ（Albert Frey）

29 王とその民

古代では、良い王には、諸民族や諸部族に平和をもたらすことが期待されていました。自分の国をまとめ、良い羊飼いのように導くことが。いつくしみ深く自分の民に接することが。良い王は、望ましいと考えられたあらゆる徳を体現していました。たとえそれが生活の現実に合っていなかったとしても。

メシア王イエスは、神によって宇宙のかしらとして立てられました。すべてのもの、すべての人の上に立つ王なるかしらとして、この方は、壊れた宇宙に、長く待ち望まれた癒やしと回復をもたらされます。かしらであるこの方のもとで、すべてのものがあるべき場所に収まり、健やかになります。この方は、一つであるべきものを再び一つにされます。この方は無秩序と、あらゆる破壊の力を取り除かれます。この方の王としての「かしらであること」のもとで、すべてが一つにまとめられます。けれども、それはまだ先の話です。

けれども、すでに今、王は平和をもたらしてくださいました。平和の君であるこの方が。当時、イエスの時代には、イスラエルは神の約束に対して排他的な権利を持つ国民でした。けれども、よみがえられたメシアは、弟子たちをすべての国民のもとに遣わされます。すべての人が招かれ、歓迎されています。私たちヨーロッパ人にとっては良い知らせです。始まりの時代には、ユダヤ人と諸国民を同じ権利を持つものとして一つに結び合わせることは、容易な過程ではありませんでした。けれども、キリストはまさにこの平和をもたらし、メシアを信じるユダヤ人と、地上のあらゆる国から来た諸国民とを一つにされました。彼らは今やこの方の民であり、そこでは古い民族の境界がなくなります。一人の新しい人へと組み合わされているのです。かしらであるキリストは、新しい創造として一つのまとまりをつくり出されます。

ユダヤ人、あるいはイスラエル人と、諸国民から来た人々との結びつきはあまりにも緊密なので、それを一つのからだ、一つの有機体にたとえることが

できます。キリストはかしら、つまり頭であり、すべての人から成るこの方の民は、この方のからだ、その体なのです。

ユダヤ人と諸国民は今や、ともにこの方の王国の市民となります。こうして彼らは、いわば二つのアイデンティティーを持つことになります。一方では、以前の自分であり続けます。自分の国の市民です。けれども、それに加えて、キリストのからだに組み入れられます。彼らは別の国、天の国の市民となるのです。後者は永遠に続きます。

教会の建物はバシリカと呼ばれました。それによって、それが支配者、バシレウス、つまり王の家であることが明らかにされました。バシリカという言葉はそこから来ています。王の民が王と出会う場所が、この名で呼ばれているのです。確かに、この集まりのためには、特別な建物も、いや建物そのものも必要ではありません。けれども、建物があるところでは、それは王への敬意の表れなのです。

キリストのからだにおいて多くの民に平和がもたらされることは、宇宙的な規模を持つ、すぐれて政治的な出来事です。多くの民の人々が、そのあらゆる特性と過去をもって、キリストの十字架のもとで敵意を葬るとき、それは目に見える影響をもたらします。彼らがその一部である社会においてもです。平和の王が治めるところでは、暴力も差別も争いもやみます。

これほど多くの民族が一つに集まるとき、それは大きな挑戦です。王がもたらしたこの平和は、ひとみのように守られなければなりません。ほかの人を受け入れ、真剣に受け止めること。赦し、罪を覆うこと。自分を重要視しすぎないこと、言い換えれば、隣人を自分自身のように愛すること、それが王のこの新しい共同体の倫理です。

王の民に属することは、値をつけられない贈り物であり、栄誉です。どんな王でもいいわけではありません。あなたがこの民に属しているなら、私たちの王は、すべての王の上に立つ王です。この方の民である私たちには、信じられないほどの特権があります。陛下の謁見の間での、途切れることのない謁見。私たちのそばにいてくださる王。この方はご自分の民のもとに、一人ひとりのもとにおられます。この方の未来は私たちの未来です。この方の富

は私たちの富です。この方はご自分の力を私たちに与えてくださいました。けれども、その力は支配や権威においてではなく、弱さにおいて完全に現れます。この方の力は、この方にしかできないことを、私たちに経験させ、行わせてくださいます。ナザレ人イエスの内にあった力が、私たちの内にも働いているのです。

まことに、主は私たちをさばく方、主は私たちの指導者、主は私たちの王。この方が私たちを救われる。

イザヤ書33章22節

エペソ人への手紙1章9〜11節、2章11〜22節、4章1〜6節、イザヤ書9章6節、ガラテヤ人への手紙3章28節、コロサイ人への手紙3章10〜11節、コリント人への手紙第一12章、ヨハネの黙示録1章5節、19章16節、テモテへの手紙第一6章15節、使徒の働き1章4〜8節

30 王の食卓で

ダビデ王の生涯から取ったこの物語は、ありふれたものではありません。王権が確立された後、ダビデは、亡くなった王サウル、自分の前任者の子孫や親族を捜します。サウルはダビデを追い回し、殺そうとした人でした。ダビデは今、復讐しようとしていたのでしょうか。サウルの孫、ヨナタンの息子で、メフィボシェテという名の人が見つかりました。彼には障がいがあり、両足が不自由でした。彼は助けを必要とし、一人では動くことができませんでした。想像してみてください。ダビデはこの人を自分の食卓に招くのです。一度だけでなく、毎日、生涯にわたって、彼は王とともに食事をすることが許されます。

これこそ私は愛と、それどころか敵への愛と呼びます。そして足の不自由なメフィボシェテは、私たち人間がどれほど無力であるかを示しています。神のもとに来ることは、神の助けによってしかできません。私たちには障がいがあります——体ではなく、霊的な障がいが。私たちは一人では来られず、呼ばれなければならないのです。私たちはあまりに気が散り、あまりに賢く、あまりに不信仰です。

キリストであるイエスは、私たちをご自分の食卓に招いてくださいます。この方は、交わりを持ち、語り合い、楽しみ、ともに喜ぶことが大好きなのです。

あなたは主の晩餐という言葉を聞いたことがあるかもしれません。聖餐、あるいはパンを裂くことという言葉を。王は、記念の食事を定められました。パンとぶどう酒は、王の十字架の死と、王が私たちのために流された血を思い起こさせます。この記念の食事を祝うとき、私たちは私たちの王の死を告げ知らせているのです。王が王の威光をまとって再び来られる、その時まで。

私たちには王が見えませんが、それでも王は目に見えないかたちでそこにおられます。この方の民が集まり、この方をあがめ、この方を思い、この方に

感謝し、この方をほめたたえるところでは、どこでも。イエスに心を奪われた、王に忠実な人々の固く結ばれた共同体です。何ものも、彼らがこの王を愛し、この王に忠実であることを妨げることはできません。

この王の食卓は、信仰の事柄です。王が亡命の身にあるあいだ、イエスの弟子たちはこの食卓の周りに集まります。記念の食事を祝うとき、彼らは互いに顔を合わせ、互いに励まし合います。この間の時が過ぎ去ったとき、王はご自分の民とともに祝われます。もはや信仰によってではなく、目に見え、手で触れることのできる現実の中で。

私の敵の前で、あなたは私のために食卓を整えてくださいます。晴れやかに私をあなたのもとに迎え、私の杯を縁まで満たしてくださいます。

詩篇23篇5節

サムエル記第二4章4節、9章、サムエル記第二19章24～30節、21章7節、マタイの福音書26章26～30節、マルコの福音書14章22～26節、ルカの福音書22章14～20節、コリント人への手紙第一10章14～22節、11章20～34節、詩篇23篇5節、ヘブル人への手紙13章10節

（歌詞はドイツ語の原文のまま）

Königlich strahlt Dein Licht

Du bist ewiglich

Niemand kommt Dir gleich

Sanftmütig führst Du mich

Hin zu Deinem Licht

Ich darf bei Dir sein

Sei Du der Mittelpunkt in meinem Leben

Der Mittelpunkt in meinem Herzen

Ich gehöre Dir

Sei Du der Mittelpunkt in meiner Schwäche

Der Mittelpunkt in meiner Stärke

Ich gehöre Dir

Ich will Dir nah sein

Ich werd Dir folgen

Mein ganzes Leben in Dir verliern

作詞・作曲：ユーリ・フリーゼン（Juri Friesen）、パウラ・フリーゼン（Paula Friesen）© 2012 Outbreakband

31 王の庭園

ニューヨーク市の航空写真を見ると、強い印象を受けます。セントラルパークは、摩天楼が立ち並ぶ家々の海のただ中にある、大きな緑のオアシスのようです。長さ4キロメートル、幅は1キロメートル近くあります。どの大都市にも公園があります。憩い、静けさ、木陰、果実、さわやかさ、色とりどりの美しさと香り、そして祭りを祝うこと、それが今日に至るまで庭園というものの典型です。それは何となく私たちに楽園を思い起こさせます。女王や王たちは、それぞれ庭園や公園を持っていました。どれも、ほかよりいっそう美しいものでした。

聖書は庭園で始まります。そして都で終わります。けれども、そこにもセントラルパークのようなもの、楽園のような都の庭園があるのです。

初めに、万物の王である神が、夕方の涼しい風の吹くころ、園を歩き回られたとあります。神は明らかにそれを喜んでおられました。ご自分が「神の庭師」として造り、人間の手にゆだねられたものを喜んでおられたのです。園の手入れと保護は、人間にゆだねられていました。

何千年も後に、神は人となられました。生涯の終わりに、イエスは弟子たちを従えて、ゲツセマネという名の園に入って行かれます。オリーブの林です。そこで王は、祈りの格闘のために退かれます。この方は、ご自分が十字架刑の判決を受けることが迫っているのを知っておられます。この園で私たちは、十字架の上での肉体の拷問よりもひどいものが、この方に迫っていることの証人となります。問題は、すべての人のために、新しい、よりすばらしいエデン、新しい楽園を可能にすることです。その代価は計り知れません。そのためには、私たちの罪と死が取り除かれなければなりません。この方ご自身が罪を負い、そのために死なれるのです。罪のなかったこの方にとって、それは限りなくつらいことです。この方はほかの道を求められます。けれども、ほかの道はありません。それから、この園でこの方は捕らえられ

ます。この方の苦難の道が始まります。それは十字架で終わります。そして墓で。

この墓もまた、園の中にありました。マグダラのマリアは十字架刑を目の当たりにし、それから一人の人がイエスを十字架から降ろし、近くの岩の墓に運ぶのを見ていました。この園に、マリアは日曜日の早朝に行きました。一人の人が彼女に出会います。彼女は、それが園の番人だと思います。それはエデンの「庭師」です。王が帰って来られたのです。死者の中からよみがえって。新しい、よりすばらしいエデンの楽園が来るのです。王の数えきれない姉妹たち、兄弟たちが住む楽園が。それが、マリアが今、弟子たちに届けることを許された良い知らせです。

ニューヨークにセントラルパークがあるように、新しいエルサレムには庭園の楽園があります。死と復活によって、新しい次元の新しい創造が可能となりました。それはすでに始まっています。それは新しい地において、新しいエルサレムにおいて完成されます。美しさの、完全さの極みです。そこに神の御座があります。そこからいのちの水がわき出て、庭園を潤します。いのちの木がそこにあり、豊かな実を結びます。それは、そこにいのちと癒やしがあることの象徴です。そして、あらゆる渇き、何よりもたましいの渇きがいやされることの。

この場所は非現実的に見えます。けれども、聖書は何度も、この神の新しい世界に加わるようにと招いています。いわば読者に向かって呼びかけているのです。だれでもこの生ける水を価なしに飲むことができます。それは福音、良い知らせのもう一つの絵です。福音は、永遠にまで続き、死を恐れる必要のないいのちを与えてくれます。

もう一つ。聖書は御霊の実について語っています。それは、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制といったものです。どこか、今日の私たちキリスト者も王の庭園なのです。王はそこで、そのような実を探し、収穫されます。これらの実は、私たちの生まれつきの性質にはほとんどそぐいません。だからこそ、それは御霊の実と呼ばれるのです。この神の御霊の助けによって、それは育つことができます。

エデン――始まり、理想、けれども同時に堕落と決裂の場所。ゲツセマネ――メシアが、あきらめてしまおうという誘惑に抵抗された場所。園の中の墓――復活によって死が打ち負かされた場所。そして、よみがえられた王が最初に一人の女性に出会い、弟子たちへの最高の知らせを彼女にゆだねた場所。新しいエルサレムの都の庭園――神は小羊によってご自分の目標に到達されました。そこで私たちは家にいるのです――永遠のふるさとに。

確かに、主はシオンの町を慰め、廃墟から新しくよみがえらせる。荒れ果てた地を楽園とし、それはエデンの園のように花咲き、実を結ぶ。そこには喜びと歓声が響き、あなたがたはあなたがたの神に感謝の歌を歌う。

わたし、主は、いつでもどこでもあなたがたを導き、乾いた地でもあなたがたを満ち足らせ、わたしの力を与える。あなたがたは、いつも十分な水のある園のようになり、決して涸れることのない泉のようになる。

地から種が芽を出し育つように、力ある神である主は、私たちの幸いを育て、すべての民のあいだで私たちの誉れを増し加えてくださる。

イザヤ書51章3節、58章11節、61章11節

創世記2章8節以下、ヨハネの黙示録22章1〜5節、22章17節、マタイの福音書26章36節、ヨハネの福音書19章41節、20章1〜18節、ガラテヤ人への手紙5章16〜26節

32 政治的なイエス

本物の王とは、自分の王としての統治権を行使する者です。自分の国を形づくり、法を定め、税を課す者です。

イエスが王であるなら、そしてそれには何の疑いもありませんが、この方は政治的な要求を持っておられます。そうであれば、この方には、公共の営み、行政、立法を、ご自分の考えとみこころに従って執り行う権利があります。それは、この方の国がこの世のものでないとしても当てはまります。

ところどころで、キリスト者たちは、キリスト教の原則を政治に持ち込もうとしています。キリスト教的な影響を及ぼそうとしています。その一つの実が奴隷制の廃止でした――とてつもない突破口です。

亡命した王たちがいます。あるいは、亡命しなければならなかった王たちが。ときに彼らは、忠実な家臣たちを通して、なお影響を及ぼそうとします。メシア王イエスの場合も似ていますが、やはり違います。この方はご自分で退かれ、人格としても体としても、ここにはおられません。父が天においても地においてもすべての権威を与えられたにもかかわらず、この方は政治的な権力を行使なさいません。いつでもそうしようと思えばできるのに。けれども、それは福音書の記録から知ることのできるこの方の本質に、まさに合わないのです。この方の王国は、この世の国のようではありません。この方の支配には、いわば新しい世界が必要です。すべてが変わらなければなりません。新しいぶどう酒は新しい革袋に……。

この方は、ご自分に従う者たちを地上で集めておられます。彼らはこの方の王としての戒めに従います。少なくとも、そうしようとしています。彼らは政治的な権力を求めて争いはしません。けれども、それができるところでは、自分たちの影響力を用います。人権、信教の自由、平等のために、彼らは立ち、声を上げます。公共の営みと政治の、小さな、あるいは大きな場面で。

けれども、政治的な統治の要求を、イエスは確かに持っておられます。この方は、王たち、皇帝たち、大統領たち、独裁者たちに取って代わられます。彼らは去り、この方は来られます。そして、とどまられます。

まさにそれが次の章のテーマです。

33 王の王の帰還

もしかすると、あなたは叙事詩『指輪物語』のアラゴルンを知っているかもしれません。一人の野伏です。貴族ではありません。彼の名は「王の勇気」という意味です。この人が、だれも予想しなかったことに、サウロンに勝利した後、アルノールとゴンドールの正統な上王となるのです。この叙事詩の第三部は『王の帰還』と題されています。

もしかすると、このサーガの作者トールキン（Tolkien）は、私が思い浮かべずにはいられないことを心に描いていたのかもしれません。ナザレの建築職人のことを。建築業に携わる目立たない一人の人のことを。その人は生涯、ガリラヤの町々で長男として父や兄弟たちとともに家を修理し、あるいは新しく建てていました。高貴な仕事ではありません。名声もありません。生涯の最後の三年間は違っていました。そのすべてを、私たちは見てきました。

イスラエルの人々は、イエスを、奇跡を行う巡回説教者、あるいはラビとして記憶しています。復活の後、イエスを見たのは弟子たちだけで、イエスに従っていない人々は見ませんでした。こうして、十字架につけられた一人の人として記憶に残ります。ここまでは、今日でもたいていの人が同意するでしょう。

けれども、それはいつか突然変わります。またしても、三つの言葉ですべてが言い尽くされます。この方は再び来られる！この方は私たちの世界に、私たちの惑星に戻って来られます。世界を立ち止まらせる出来事です。聖書には、それが何度も、印象深く描かれています。それを余すところなく描くには、言葉が足りません。人々は言葉を失うでしょう。シドニーからローマまで、北京からワシントンまで。目に見えない世界、来世を私たちから覆い隠している幕が開きます。舞台は、主イエス・キリストの大いなる日のために空けられるのです。

諸国の民が慕い求める方が来られます。二度目に。今度は、すべての人の目に見えるかたちで。もう議論はありません。疑いもありません。あざけりもありません。その時が来たのです。夢を見ているのではないかと疑う人もいます。そうです、ある人々にとっては夢が実現します。ほかの人々、神を否定する人々、キリストを憎む人々、無関心な人々にとっては、むしろ悪夢となるでしょう。キリスト者たちは、この日を待ち焦がれてきました。彼らの希望が実現します。今から永遠に、もはやどの人間も決定権を持ちません。ただこの一人の人、ただ一人の完全で正しい方だけが、そのときから無制限の主権的支配を持たれるのです。



なぜ王は再び来られるのでしょうか。この方はご自分の約束を果たされるのです！何十億回も祈られてきた主の祈りが、ついに聞き届けられます。御国が来ますように、みこころが天で行われるように、地でも行われますように！

この方は、イエスに従う者たちの贖いを完成させるために来られます。同じように、搾取され、虐げられてきた被造物も、この日を待ち焦がれています。被造物は贖われます。王が癒やしをもたらされるのです。

王は復讐するために来られるのでしょうか。ご自分が十字架につけられたことの？これほど多くの人々に拒まれたことの？いいえ、イエスは「ハルマゲドンの虐殺者」にはなられません。聖書の最後の書である黙示録の多くの描写は、この世のすべての王たち、とりわけ当時のローマ皇帝に対する皮肉であり、パロディーでさえあります。人間は、人間のやり方で復讐します。それは償うことも、回復することもできません。人間の復讐はエスカレートし、ほとんどいつも、自分が受けた損失以上のものを破壊しようとします。イエスのこの来臨について、それは復讐の日だと言われています。神の聖なる、正しい復讐です。イエスは、死の傷を負った、屠られた小羊として描かれています。十字架への、人類のためのこの方の死へのフラッシュバックです。敵を愛し、自分で復讐しないようにと命じさえした方が、血の海をつくり出すために来られることはありません。それは、もし諸国が巨大な兵器庫を使用することになれば、人間が自分自身にすることです。

強制する力は、この方が現れるときには、もはや必要ありません。ゲツセマネの園では、「わたしがそれだ」というこの方の言葉で十分であり、兵士たちはみな地に倒れました。この方の大いなる日に、すべての人が武器を置きます。武器は落ち、言葉も、行いも、確信も崩れ落ちます。そのために戦争は必要ありません。この方の目に見える臨在が、すべての膝を折らせるのです。

どのようにイエスは再び来られるのでしょうか。公然と、目に見えるかたちで、聞き逃しようもなく、見過ごしようもなく、突然、思いがけなく、劇的に、恐ろしく、大いなる力をもって、大いなる光の輝きのうちに栄光に満ちて、天から、雲に乗って、数えきれない御使いに伴われて。神ご自身が、御子、キリストであるイエスという人格において来られるのです。

私たちの想像力は限界に達します。この出来事は、ほとんど思い描くことができません。昼と夜の移り変わりは、もはや何の意味も持ちません。時が止まります。私たちのすべての予定と義務は終わります。だれももう私たちを待っていません。そのとき、だれもがただ一つのことに、王と、王が語り、行おうとしておられることに集中するのです。

何のためにイエス・キリストは再び来られるのでしょうか。毎週日曜日、何百万人ものキリスト者が、古くからの、そして今も変わらず生きている使徒信条を唱えます。

> 天に昇り、全能の父なる神の右に座しておられます。そこから来て、生きている者と死んだ者とをさばかれます。

想像してみてください。すべての死者、かつて生きたすべての人がよみがえるのです。それほどの爆発的な創造の力が、この方の再臨において現れるのです。

最後に問いがあります。それはいつ起こるのでしょうか。イエスと使徒たちは、その時をだれも知らないと言いました。たとえ話の中で、イエスは、それがとても長くかかるかもしれないことを示唆されました。理由の一つは、王の福音がすべての場所で人々に届いていなければならないということです。それは成就し始めています。

この方の来臨の時は、苦難と大きな困窮の時として描かれています。人々は、地上に起ころうとしていることへの恐れと予感のあまり、途方に暮れるでしょう。終わりが来る前に、天における異常な出来事がそれに伴います。

この大いなる日に、まだ王に赦しを願う可能性があるかどうかは、今日だれにも言えません。私は、王に一度も関心を持たなかった人々や、王を意識的に拒みさえした人々のことを考えています。今日生きているすべての人に、この切実な訴えが向けられています。

今日、もしあなたがたが主の御声を聞くなら、あなたがたの心を頑なにしてはならない。今日――明日ではなく――が救いの日です。

今日、何百万もの人々が、すでに旧約聖書でさえ予告されていたこの栄光の日を待っています。それは彼らの本当の人生の目標です。あなたもその一人になってください。この方が再び来られることを知っている人々の側に立ってください。何一つそれらしく見えなくても、この方は約束されたのです！

神のさばきの日は、盗人のように思いがけなく来ます。その日、天はすさまじい轟音とともに消え去り、天の万象は炎に包まれ、地とその上でかつて起

こったすべてのことは、もはや見つからなくなります。

しかし神は私たちに、新しい天と新しい地を約束してくださいました。そこにはもはや不正はありません。神のみこころが治めるからです。この新しい世界を、私たちは待ち望んでいるのです。

ペテロの手紙第二3章10節、13節

マタイの福音書24章27～30節、44節、26章64節、マルコの福音書13章26節、14章62節、ルカの福音書17章24節、ローマ人への手紙8章18節、テサロニケ人への手紙第一1章10節、2章19節、3章13節、4章13～18節、5章1～11節、テサロニケ人への手紙第二1章6～10節、2章8～12節、テモテへの手紙第二4章1節、8節、テトスへの手紙2章13節、ペテロの手紙第一1章7節、13節、4章13節、ヨハネの黙示録1章7節、19章11～16節

34 なんという栄光の日

（歌詞はドイツ語の原文のまま）

Einst, als im Himmel der strahlendste Tag war

Herrschte auf Erden die dunkelste Nacht

Da wurde Jesus als Mensch geboren

Er hat uns Gnade und Wahrheit gebracht

Das Wort wurde Fleisch und das Licht wohnte bei uns

Es scheint in der Nacht

Für uns geboren, für uns gestorben

Er nahm die Sünde der Welt mit ins Grab

Am dritten Tag ist er auferstanden

Einst wird er kommen, welch herrlicher Tag

Welch herrlicher Tag

Dann führten sie ihn hinauf um zu sterben

Ans Holz genagelt, das Kreuz aufgestellt

Der Mann der Schmerzen verachtet, verstoßen, er trug die Sünde

Der Heiland der Welt

Die heilenden Hände sind weit ausgebreitet für unsere Schuld

Am dritten Tag hielt das Grab ihn nicht länger

Weg war der Stein und die Grabkammer leer

Er ist auferstanden, den Tod überwunden

Er fuhr auf zum Himmel, der siegreiche Herr

Er gab neues Leben

Die Schuld ist vergeben, mein Retter ist er

Einst wird er kommen, welch herrlicher Tag

Welch herrlicher Tag, herrlicher Tag

Oh bald wird der Tag seiner Wiederkunft kommen

Bald werden wir ihn in Herrlichkeit sehen

Er wird die Seinen dann ganz zu sich nehmen

Staunend werd ich vor ihm stehen

Für uns geboren, für uns gestorben

Er nahm die Sünde der Welt mit ins Grab

Am dritten Tag ist er auferstanden

Einst wird er kommen, welch herrlicher Tag

Welch herrlicher Tag

Herrlicher Tag

Herrlicher Tag welch herrlicher Tag

アルベルト・フライ（Albert Frey）

35 正しいさばき主である王

メシア王が現れます。今、この方はここにおられます。次に何が来るのかが、すべての人の頭をよぎります。すべてが非現実的に見えます。自然法則は効力を失っています。新しい時代が始まります。だれにとっても、それが決定的に明らかになりました。

目に見える世界と目に見えない天の世界との境界線が突然消えたことだけでも十分ではないかのように、それに劣らず劇的なことが起こります。死者がよみがえるのです。この惑星にかつて住んだすべての人が、あらゆる時代から、突然そこにいます。死ななかった人々と同じように生き生きとして。彼らの社会的地位は大きく異なっていましたが、今はみな同じです。皇帝も、王も、宗教の創始者も、普通の人々も、数えきれない兵士も、難破した人々も、貧しい人々も、最も貧しい人々も。飢え死にした人々も、殺された人々も、奴隷も、自由人も。子どもたち、想像もつかないほど多くの子どもたち。生まれる前の、母の胎内で殺されたすべての子どもたちもそこにいます。

少しずつ、すべての人が気づいていきます。今まさに天から来られた神、メシアであるイエスが、死者を墓から、また彼らが散らばっていたあらゆる場所から呼び出されたのだと。遠い昔に地を存在へと呼び出したこの方の声が、今、死者をいのちへと呼んでいるのです。

さばきの時が来ました。神の御子イエスは、このさばきを行う権威を授けられました。いのちを、誘惑を、試練を、不当な苦しみを知っている一人の人です。すべての人がこの方の前に集められます。だれもが一人でこの方の前に立ちます。大量処理も、略式手続きもありません。あらゆる瞬間、あらゆる行い、あらゆる思い、あらゆる動機、あらゆる言葉が見られます。だれもが自分の人生をまっすぐ見つめることになります。そして、自分がほかの人にしたことを。そして、被害者であった人々が感じたことを感じるのです。

これほど多くの人々とその生涯の年月について、それがどのようにして可能になるのか、だれにも言えません。天には、すべてが保存されたハードディスクは必要ありません。私たちの前には全知の方がおられるのです。私たちの思いと感情を知っておられる方が。

それであなたは安心するでしょうか。自分自身についてすべてを知らされることが。もう一度見ること、あるいは体験することさえが。

このさばきはなければなりません。正義が打ち立てられなければなりません。加害者にも被害者にも正義が必要です。どんな人間の法廷にも、それはできません。だからこそ、しばしばそう呼ばれる最後の審判は、キリスト教の希望の欠くことのできない一部でもあるのです。すべてが明るみに出ます。すべてが神の基準によって判断され、正しくされます。個人が、集団が、民族が行ったことが。

イエスは買収されることのない方です。人をえこひいきなさいません。罪であったものは罪のままです。良かったものを、この方はほめてくださいます。このさばき主の前で、人々は自分の罪を認めなければならず、それを心の底から罪として感じるでしょう。そして、さばき主の判決を受けることになります。

さばき主ご自身が、人々の罪のために死なれました。この方は私たちの罪の償いです。私たちの罪のためだけでなく、全世界の罪のための償いです。このさばきにおいて、さばき主は私たちに敵対するのではなく、私たちの味方です。信じたすべての人の味方です。それでも、福音を聞いたり読んだりした人々にとって、その日、一つのことは数に入りません。私たちの良い行いだけでは――そもそもそれがあるとしても――私たちを救いません。自分は良い人間だったと望みをかけるなら、そこには問題があります。自分の良い生き方を盾にとる人は、神の基準に従って完全な生き方を示さなければならないでしょう。神の戒めを盾にとる人は、一つだけでなく、すべての戒めを守っていなければならないでしょう。それでも、私たちが行った行いには大きな意味があり、重要な役割を果たすことになります。

けれども、そこで何が助けになるのでしょうか。何が肝心なのでしょうか。

問われるのは、私たちが王であるキリストとどのような関係にあるかということです。中立はありません。イエスご自身がそれをこう言い表しておられます。わたしの味方でない者はわたしに敵対する者です。言い換えれば、そのときになってからではなく、今、ここで、今日、イエスが私たちにとってだれなのかをはっきりさせなければなりません。この王は私たちのところにまで身を低くして、赦しを差し出しておられます。王の恵みの申し出を聞きながら、それを放っておくなら、すべてが明らかにされるあの日に、何と言うつもりでしょうか。そのとき、私たちの人生のすべての不正、罪、自己中心が、私たちと王とのあいだに立ちはだかるとしたら。

そこには、イエスについて一度も聞かず、イエスの時代より前に生きた人々もいるでしょう。イエスが彼らをどのように扱われるかは、安心してイエスの神としての恵みと正義にゆだねることができます。けれども、イエスについて聞きながら、それはすべて自分には関係ない、あるいは作り話だと考えた人々――彼らにとっては、良い結末にはならないでしょう。

この王はどれほど恵み深くても、だれにも自分に仕えるよう強いることはなさいません。聖書が地獄について語るとき、それは、この王に仕えなくてもよい場所として語っています。けれども、この王はただの何者かではありません。この方はアルファでありオメガ、初めであり終わりです。この方はすべての存在の中心です。すべての良い存在の中心です。この方から切り離されたら、存在が良いものになることは決してありません。だから、できる人は、今日、選び取ってください。

まことに、主は私たちをさばく方、主は私たちの指導者、主は私たちの王。この方が私たちを救われる。

イザヤ書33章22節

その主権はますます大きくなり、その平和は、ダビデの王座とその王国において限りがなく、彼はさばきと正義によって、今よりとこしえまで、これを堅く立て、これを支える。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

イザヤ書9章7節

詩篇36篇6節、76篇8節、89篇14節、伝道者の書12章14節、イザヤ書5章16節、9章7節、ダニエル書7章10節、22節、マラキ書3章5節、マタイの福音書12章36節、25章31〜46節、ルカの福音書20章47節、ヨハネの福音書5章22〜30節、ローマ人への手紙2章5節、14章10〜12節、テサロニケ人への手紙第二2章12節、ヘブル人への手紙9章27節、ペテロの手紙第一4章17節、ヨハネの黙示録20章11〜15節

36 永遠の王の支配

イエスが治めておられる！イエスに従うすべての人は、それに懸けています。けれども、その統治とはどのようなものなのでしょうか。世界とその発展、政府のすること、政府どうしの関わり方、キリスト者が迫害されていること、そのすべてが続いています。この方はすでに今治めておられるのでしょうか。それとも、来られてから初めて治められるのでしょうか。

私たちの世界への神の介入は、すでに今――まだという言葉で理解することができます。言い換えれば、さいは投げられたのです。ゴルゴタの勝利は、Dデー（D-Day）、決戦の日です。1944年6月6日、連合軍がノルマンディーに上陸した日が、そう呼ばれています。それは第三帝国の終わりの始まりでした。人々と被造物のための神の救いを、イエスはエルサレムでのあの聖金曜日に成し遂げられました。それは、この過ぎ去っていく、傷ついた、死ぬべき世界の終わりの始まりです。いのちに敵対する闇の力の終わりでもあります。今はまだ、暗い力、堕落した御使いたちや悪霊たちが人々を惑わし、奴隷にし、できるかぎり人々の救いを妨げています。

人々と被造物における贖いが完全に起こるのは、キリストが再び来られるときです。今、私たちはまだ間の時に生きています。DデーとVデー（V-Day）のあいだに。勝利の日であるVデーは、あらゆる敵意が打ち負かされるときに来ます。神の勝利が最後の言葉を持つときに。

メシア王イエスは今、ご自分の民の中で治めておられます。この方には、すべての人の上に、世界政治の上にも力があるでしょう。けれども、この方の目標は、今のままの世界に対する世界支配を引き受けることではありません。この方は、ご自分を知り、認める人々を勝ち取りたいのです。

すべての人の目に見えるこの方の来臨とともに、新しい世界支配が始まります。そこに加わるのは、この方をあがめ、この方の統治に備えているすべての人々です。この世のすべての国は過ぎ去りますが、この方の国は永遠に続きます。この方が来られるとき、新しい世界、新しい時代が始まります。回

復の過程があるのか、古いものから新しいものへの根本的で短い交代があるのか、それはまだわかりません。

暗い日々に人々を励ましてきた、希望に満ちた約束が成就します。

> 「ひとりのみどりごが生まれ、来たるべき王が私たちに与えられる！その方に与えられる栄誉の名はこうである：思慮深い支配者、力ある勇士、永遠の父、平和の君。
>
> その力は遠くまで及び、長く続く平和が訪れる。その方はダビデの王座に着いて治め、その支配はとこしえに続く。神の法の秩序を守るからである。主、世界の支配者がそう定め、それを行われる。」

ダビデの王座が再び満たされました！バビロン捕囚とともに、王の継承は途絶えていました。イスラエルには王座も王もありませんでした。けれども、ダビデ王へのこの約束がありました。

> 「わたしは、あなたの身から出る子孫をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる！」

十二人、使徒たちにとって、メシアの昇天によって、今やダビデの王座が永遠の君イエスによって占められたことが明らかになりました。この方は、神によって主とされ、キリストとされています。ダビデとの神の契約は成就しました。イスラエルのために。まだすべてはエルサレムとイスラエルで起こっています。ダビデへの確かな恵みは、この民の正当な期待です。けれども、驚くべきことが起こります。ダビデの王座は今や、地上のエルサレムにはもうありません。王座は、すべての存在の中心に、神のもとにあるのです。それはもはや、大イスラエル帝国の国境の中にある地上の国ではありません。使徒たちは、パウロも含めて、問題になっているのは天の王国だということを悟ります。イスラエルだけでなく、全世界に向けられた国です。

まず地上のものが来て、それから天のものが来ます。後者のほうが、より大きく、より栄光に満ちています。新しい地の上の天のエルサレムが、すべて

の信じる者のふるさととなります。それこそが、ダビデの子イエスの永遠の王の支配の極みです。ここで、ダビデへの約束が予想外の、違ったかたちで成就することによって、円環が閉じられます。

想像を超えた次元を持つ、イエスのこの普遍的な王の支配を、私たちはまだ見ることも経験することもできません。けれども、いつの日かその時が来ます。この方の時が来たときに。ですから、私たちが今すでに信仰によって、心の目で認めているのはこういうことです。イエスは、地上の生涯において、人として低い姿で生きられました。この方はすべての人のために死を味わい、私たちの罪のためのいけにえとして、暴力的な死の苦さをことごとく味わわれました。私たちみなのために。こうして神の恵みが、すべての被造物に及ぶためです。そして、この方が不可能なことを行い、十字架につけられるままになり、死なれたからこそ、この方は今、神の栄光と誉れをまとい、まさに栄光の勝利の冠を授けられているのです。

このダビデの子とともに、古い暦は終わりました。私たちは私たちの王に従って、その永遠の国へと入って行きます。そこでは、新しい冒険が私たちを待っているのです。

この方に、主権と栄誉と支配が与えられ、あらゆる国民、民族、言語の人々がこの方に服した。その権威は永遠で、過ぎ去ることがなく、その支配は決して終わることがない。

ダニエル書7章14節

そのとき、主は地のすべての民の王となられる。その日には、主だけが神であり、諸国の民は主だけに祈る。

ゼカリヤ書14章9節

すると、天で大きな声が響き、こう叫んだ。「この世の王国は、今やすべて私たちの主とそのメシアのものとなった。主は世々限りなく治められる！」

ヨハネの黙示録11章15節

詩篇22篇28節、45篇6節、145篇12〜13節、イザヤ書9章7節、ダニエル書2章44節、4章3節、7章27節、マタイの福音書6章10節、25章34節、ルカの福音

書1章33節、使徒の働き2章30節、ローマ人への手紙14章9節、コリント人への手紙第一15章24節、エペソ人への手紙5章5節、テサロニケ人への手紙第一2章12節、テモテへの手紙第二4章1節、18節、ヨハネの黙示録11章15節、12章10節、22章5節

37 王の恵みと賜物

恵みという言葉は、私たちの言葉づかいの中にはほとんど出てきません。私たちも、私たちの法制度も、権利を言い立てます。恵みとは、自分の権利に固執しないことを意味するでしょう。古代において、イエスと使徒たちの時代において、恵みと賜物が何を意味していたのかを理解したいと思います。

恵みと賜物を表す言葉はいくつかあります。けれども、新約聖書の中心的な概念は、ギリシア語のカリス（cháris）という言葉です。それは幅広い意味を持っています。好意、慈しみ、善意、恵み深い配慮、そしてその好意と配慮の表れ、たとえば恵みの行い、あるいは二つの言葉を結びつけて恵みの賜物です。恩人たちの贈り物は、カリスの行いなのです。

古代において、恵みや賜物は、社会全体をそのあらゆる階層にわたって貫く機能を持っていました。贈り物や好意のやり取りが、下心なしに行われることは決してありませんでした。だれかが商売を広げるためにお金を必要とすれば、それは利子だけでは済みませんでした。後援者がへりくだって手を差し伸べることは、相互の、しかし口にされない義務を生み出しました。受ける権利のない恵みや賜物を受けた人はだれでも、それによって与え手と受け手の関係に置かれました。受け手は、同じ価値の贈り物を返すことは決してできなかったかもしれません。けれども少なくとも、機会があれば、その人に自分の票を投じることはできました。そうです、恵みと賜物の相互的な「システム」は、ひどく腐敗していました。贈り物で、自分の利益のために人々を買い取ったのです。そして、だれもがそれを知っていました。

今日の私たちのために、もう一度言います。恵みとは、だれかが主権をもって与えることのできる賜物でした。けれども、受け手はそれによって義務を負いました。与え手はそれを知っていて、見返りを求めるのにふさわしい時がいつなのかを、いつでも考えることができました。恵みや賜物によって、一種の依存関係が生まれたのです。ほんの少しですが、今日でもまだそうで

す。贈り物、それも特別な贈り物を受けると、私たちは次の機会に何かを贈り返します。それに対して、ある種の義務を感じるからです。

イエスのことに話を移しましょう。この方について、パウロは計り知れない言葉を語っています。

> あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みがどのように示されたかを知っています：この方は富んでおられたのに、あなたがたがこの方の貧しさによって富む者となるために、貧しくなられたのです。

すべてのものを存在へと呼び出し、すべてのものを所有しておられる宇宙の王イエスは、物議を醸す二つのことをなさいます：この方はすべての人に与えられます。分け隔てなく。そして、途方もない気前のよさで贈ってくださいます。それは当時の文化に合いませんでした。今日の文化にも合いません。ほかの人々が豊かになるために、自ら貧しくなり、すべてを手放すこと。それを私たちに与えること、それが恵みです。値しないものです。私たちの貧しさが、この方の心を動かしたのです。

古代における恵みの意味は、王イエスにおいても意味を持っています。ご自分の賜物によって、この方は関係をつくり出したいと願っておられます。まさにそれを、この方はご自分の恵みによって表しておられます。強いられることのない交わりです。私たちが何かをお返しする交わりです。それは私たちが受けたものよりはるかに少ないものです。けれども、私たちの心、私たちの人生は、この方のものであるべきです。この方は私たちの声を受けるべきです。いまだに大多数がこの方を拒んでいる世界の中で。

この方の恵みの賜物は、私たちに多くのものをもたらします。この方は私たちを豊かにしたいと願われ、そのとおりになりました。ここに挙げるのは、私たちが贈られたもの、そしてこの王を迎え入れるすべての人が贈られるもののほんの一部にすぎません。赦し、無罪の宣告、贖い、永遠のいのち、解放、聖化、そして自由です。

私たちの応答は、自分の人生をこの方に明け渡さずにはいられないということです。それをこの方にささげることです。毎日新たに。

補足までに言えば、恵みの賜物という言葉は、新約聖書では、聖霊が与えてくださる教会の中のさまざまな能力を表すのに用いられています。教えること、癒やし、預言、異言を語ること、奇跡を行うこと、霊を見分けることといった超自然的な賜物です。それらは、神の国のために用いられるように与えられているのです。

実に、救いをもたらす神の恵みが現れたのです。それはすべての人に向けられています。

テトスへの手紙2章11節

ヨハネの福音書1章14節、16〜17節、ローマ人への手紙3章24節、5章15〜16節、6章23節、12章1〜3節、11章29節、コリント人への手紙第一12章4〜11節、コリント人への手紙第二6章1節、8章9節、エペソ人への手紙2章5節、テモテへの手紙第二1章9節、テトスへの手紙2章11節、3章7節、ヘブル人への手紙2章9節

38 王の花嫁

すべてを所有し、すべてを治めておられるこのような王は、だれに関心を持たれるのでしょうか。何がこの方の心を引きつけることができるでしょうか。だれがこの方に何かを差し上げることができるでしょうか。この方にとって、手に入れるために出かけて行こうと思うほど魅力的で、愛すべきものとは何でしょうか。

聖書は神を花婿として描いています。これは異例のことです。神が花嫁を望まれたことを前提としているからです。花婿としての神は、神がひとりでいることを望まず、交わりを求めておられることを表しています。

神ご自身が、男と女をご自分のかたちに創造されました。二人は一体となり、切り離すことのできない一つのまとまり、愛の交わりを形づくるはずでした。そして私たち人間は、すべての人ではないにしても、多くの人がそれを経験しています。ですから私たちは、神とその妻との関係について、あれこれと推し量ってみることが許されるのです。古い契約において、神ヤハウェはイスラエルと婚姻関係を結ばれました。花嫁は一人の人ではなく、多くの人の総体です。

新しい契約においては、花嫁は一つの民ではありません。花嫁は今や、あらゆる民族と国民から成る集まりです。愛されている者は、花婿のように一人の人ではありません。花嫁とは、イエスに従うすべての人を表す比喩です。同じように、イエスが来られる前に生きたすべての信仰者も含まれます。つまり、王であり花婿であるイエスを愛するすべての人の、全体として集められた群れです。花嫁と花婿のこのたとえ以上に、愛をよく言い表すことのできるたとえがあるでしょうか。

この花嫁を得るために、その心を勝ち取るために、この方はご自分の愛を証明されました。この方は花嫁のために、ゴルゴタの十字架の上での死にご自分をささげられました。この方は、ご自分が本気かどうかについて、少しの

疑いも起こさせませんでした。ご自分のいのちを代価として、どうしても花嫁を手に入れたかったのです。

王は私たちのどこにそれほど魅力を感じておられるのでしょうか。古代の王たちは、身分にふさわしい相手と結婚しました。今日でもそうです。けれども、センセーショナルなのは例外です。王が普通の女性を、あるいは奴隷の女でさえ妻にするときです。私たちは愛すべき者ではありませんでした。神とその御子に関心を持っていませんでした。神の敵のようにふるまっていました。私たちの物語は理解を超えています。この方は私たちの中に、そのために死ぬ価値のある何かを見ておられました。私たちがその愛に応えず、はねつけるかもしれない危険を冒してまで、死ぬ価値のある何かを。

今日すでに多くの人が、この花嫁に属しています。けれども、この方はまだ多くの人を待っておられます。

この方は、本当に模範的な花婿であり夫です。この方はご自分の花嫁を大切にされます。奴隷のようにふるまい、花嫁が清く完全になるように、花嫁を洗われます。この比喩的な表現は、この愛の関係が本物であり、これからも本物であり続けることを明らかにしています。この関係はあまりにも緊密なので、始まりのときのアダムとエバのように、キリストと教会も一体なのです。この方は愛し養うかしらであり、教会はからだ、この方のからだ（体）です。両者はともに一人の人を形づくります。このからだこそ、キリストに欠けていたものであり、今やこの方を永遠に完全なものとするのです。これはすべて比喩的な表現ですが、キリストの愛がどれほど大きく、どれほど深く、本物で、意志の強いものであるかを、ずばりと言い表しています。このような花婿を愛し、この方のもとで守られていると知ること、それは難しいことではないはずです。

花嫁はいつの日か、祝宴が始まるとき、婚礼の衣装を身にまといます。興味深いことに、その衣装は、キリスト者たちが生涯の中で行った良い行いでできているのです。ですから、この衣装は今まさに製作中であり、だれもがその仕事に加わっています。

詩篇第45篇の王の婚礼の歌から。

良い言葉に私の心は揺り動かされる。そうだ、私は王に私の作品をささげる。

王はあなたの美しさを慕い求める。王はあなたの主だから、王にひれ伏せ。

詩篇45篇1節、11節

詩篇45篇、イザヤ書61章10節、62章5節、マタイの福音書22章2〜12節、マルコの福音書2章19〜20節、ヨハネの福音書3章29節、コリント人への手紙第二11章2節、エペソ人への手紙3章18〜19節、5章25〜30節、ヨハネの黙示録19章7〜9節、21章2節、9節、17節

39 王の婚宴

私は結婚式が大好きです。とりわけ、暖かい春や夏の結婚式が。雰囲気が高揚し、喜びが夕べの空気を満たすときが。とりわけ、ただの客として、祝い、食べ、飲み、話し、笑うだけでいいときが。新郎新婦は、この日を長いあいだ待ち焦がれてきました。いざその日が来ると、あまりのすばらしさに、すぐに過ぎ去ってしまいます。できることなら引き止めて、思い出を味わうだけでなく、祝い続けたいものです。

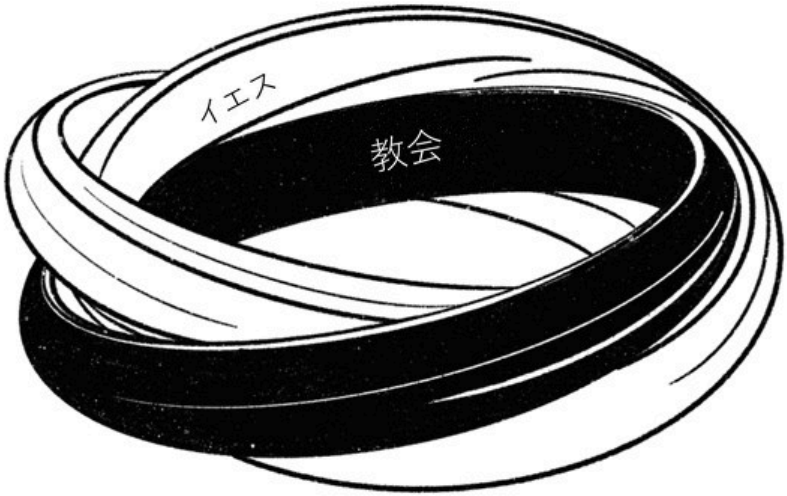
私たちがすでにたくさんのことを聞いてきた王も、婚宴を待っておられます。そして、王が偉大で栄光に満ちておられるのと同じだけ、婚礼も偉大で栄光に満ちたものになります。まさに宇宙的な祝宴です。王が花嫁を迎えるとき、天は息をのみます。あなたがこれまでに経験した、あるいはテレビで見た、すべての（王室の）結婚式を忘れてください。ミナス・ティリスの山上の城でのアラゴルンとアルウェンの結婚式もです。それは、私にとって忘れられない映画の一場面で演じられています。未来のことを考えるとき、それは少しばかりイメージをかき立ててくれます。

そうです、ここでは最も深い感動が待っています。ここでは愛の炎が燃えています。ここでは二人とも、周りの世界を忘れます。今ついに、その祝宴が来たのですから。待つことは終わりました。

この婚礼の前提は、全能の方が全世界の支配を始められたということです。あらゆる敵意は終わっています。何ものも、この婚礼を決して乱したり脅かしたりすることはできません。婚宴の時と場所は自由に選ぶことができます。どんな会場も高すぎることはありません。いいえ、どんなものも十分には良くないほどです。

想像してみましょう。楽しい祝宴、何十億もの人々が羽目を外して祝うパーティーです。疲れることもなく。それがどうして可能になるのか、私に聞かないでください。そのことで私は頭を悩ませません。招いてくださるのは全

能の方、すべてのものの創造主です。この祝宴で私たちは、この方こそ喜びと、祝うことと、歓声の発明者であることを見るでしょう。



新しくされた地が会場となります。私たちが今すでに知っているような、あらゆる美しさをもって。けれども今度は、すっかり改装され、修復されています。新しくされています。それからさらに美しくされます。私たちがこの方にとってそれだけの価値があるからです。この方がこの祝宴のための場所を備えてくださいます。この方は、ご自分の愛が目に見えるかたちで、ご自分のやり方で、すべてを清め、すべてを飾られます。

聖書は、この未来の祝宴を一度ならず描いています。私が気づいたのは、この祝いの終わりをどこにも見つけられなかったということです。確かなのは、この祝宴が一日で、あるいは中東のように一週間で終わるのではないということです。そのとき、時間はもはや重要ではありません。

別のたとえで、イエスはこの婚宴について語っておられます。多くの人が招かれています。けれども、婚礼の衣装が必要です。それがなければ、すぐに目立ってしまい、追い出されます。婚礼の衣装はどうやって手に入れるので

しょうか。比喩的な意味で、聖書のことばはこう言います。「彼らは――祝宴の客たちは――その衣を小羊の血で洗って白くしたのです。」

私たちの衣は、比喩的に私たちの人生全体のことですが、ところどころかなり汚れていて、王の婚宴の光と栄光にはふさわしくありません。けれども、この方は、私たちが自分の罪から解き放たれるために、私たちのために死んでくださいました。ご自分が清くあられるのと同じように、私たちを清くするためです。花嫁と花婿は輝く白さに照り輝きます。この祝宴では、私たちの暗い、いかがわしい過去を思い出させるものは何もありません。ただ、花婿の手と足とわき腹の傷跡だけです。この方の愛のこれらの証拠は、永遠の記念として残ります。

本当のことを言えば、王は今日、今この時も、実際に未来の婚宴に招いておられます。この方は、招くためにご自分の民を遣わされました。しかも、何の優遇も特典もなしに、すべての人を招いておられるのです。すべての人を。貧しい人も豊かな人も、強い人も弱い人も、孤独な人も社交的な人も、病気の人も、罪人も、絶望している人も、忘れられた人も、自分の人生を振り返って、そこに良いものを何一つ、あるいはほんのわずかしか見いだせない人も。

若い男が自分の娘と結ばれるように、あなたの創造主はとこしえにあなたと結ばれる。花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神はあなたを喜ばれる。

イザヤ書62章5節

イザヤ書61章10節、62章5節、マタイの福音書22章2～12節、コリント人への手紙第二11章2節、エペソ人への手紙5章25～30節、ヨハネの黙示録19章7～9節、21章2節、9節、17節

（歌詞はドイツ語の原文のまま）

You’re my friend

And You are my brother

Even though You are a King

I love You more than any other

So much more than anything

Du bist mein Freund

Und Du bist mein Bruder

Obwohl Du ein König bist

Ich liebe Dich mehr als jeden anderen

So viel mehr als alles andere

Du, o Herr, bist mein Freund und Bruder, du mein König und mein Gott!

Dich begehre ich mehr als alles, so viel mehr als höchstes Gut.

40 彼らは地を治める

この本で問題にしてきたのは、王の王のことでした。まず私たち人間のことではありません。けれども、それはほとんど切り離すことができません。この本の初めを覚えているでしょうか。そうです、神は人をご自分のかたちに創造されました。人が地を治めるためです。けれども、そのすべては根本から失敗しました。今日もなおそうです。真の王は、がれきと破片とちりの中から私たちを起こすために来られました。そして私たちを新たに王として立てるために。それは信じられないことですが、本当です。神は私たちとともに目標に到達されます。ご自分のもとに来るすべての人とともに。自分には赦しと救いと癒やしが必要だと認めるすべての人とともに。

神は、ご自分の王である私たちを、王の王であるご自分の御子と一つにしたいと願っておられます。そのために、神は高い代価を払ってもよいと考えられました。

> ……そして、真理の信頼できる証人であり、死者の中から最初によみがえり、今や地のすべての王を治めておられるイエス・キリストから。
>
> 私たちを愛し、ご自分の血によって私たちを罪から解き放ってくださった方、私たちを共同統治者とし、ご自分の神であり父である方のために、ご自分の国の王とし、祭司としてくださった方、
>
> この方に、栄光と力が世々限りなくありますように。

こうして、イエスを告白する人々は、自分たちの王に率いられて永遠へと入って行きます。彼らは驚くでしょう。それは、彼らが夢見ていたよりも良く、豊かで、幸いなものです。イエスに従って歩んだことは、それだけの価値がありました。彼らの真実と忠誠は報われます。それでも、彼らの永遠の幸いは、今もこれからも、値しないものです。この幸いは、すべての人に開かれています。

けれども、終わりに来る前に、もう一つ。イエスの民はすでに今、王であり祭司です！けれども、彼らはどのように治めるのでしょうか。彼らは世界の出来事に影響力を持っているのでしょうか。あるいは、それを試みるべきなのでしょうか。

彼らの個人的な生活については、彼らが自分自身の、個人的な人生において王として治めるという、不思議な言葉が当てはまります。罪は敵です。あらゆるいのちに手を伸ばしてそれを支配し、神から引き離し、重荷を負わせようとする破壊的な力としての罪です。けれども、この力は、私たちが属している王の死と復活によって打ち砕かれています。罪が私たちを治める必要はなく、私たちは罪を支配することができますし、そうすべきです――罪から場所と機会を奪い、罪がはびこらないようにして。神の御霊こそ、私たちの内にある生きた力です。

それがうまくいくなら、それは私たちの周りに影響を与え、作用を及ぼします。王として、私たちは政治的な権力を握ることはしません。けれども、不正が行われるところでは、それが何であるかをはっきりと言います。そして、可能なところでは、それを食い止めます。私たちは、メシアがその生涯においてそうされたのと同じように、忘れられた人々、抑圧された人々、飢えている人々、望みを失った人々の側に立ちます。

世界と世界の出来事に対して、私たちは王なる祭司として、共謀とでも呼べるようなかたちで影響を及ぼします。ひそかな陰謀です！暴力を用いない謀議です。転覆のためではなく、世界が良くなるために、そして世界の不正、飢え、干ばつを押し戻すために。そのために、またそれに抗して、キリスト者は自分たちの王のもとでとりなすことができます。祈り、とりなしは、目には見えないけれども、王が祈りを聞いてくださるところで目に見えるものとなる、一種の統治です。それを練習している人は、イエスが、そして私たちがイエスとともに治めることになる未来のための訓練プログラムの中にいるのです。

イエスに従う者たちは、油注がれた祭司でもあります。祝福するよう召されています。王なる祭司として。彼らは神の祝福を世界にもたらします。すべ

ての人のために。彼らは王の名によって祝福し、祈りの中で王の名を人々の上に置きます。彼らはほかの人々に、またほかの人々について良いことを語るだけではなく、神の恵みを彼らの上にもたらすのです。動物にも、家にも、家族にも、政府にも。恵みと祝福を必要としているあらゆるものに。祝福することによって、神の臨在は現実のものとなり、経験でき、目に見えるものとなりえます。愛、聖さ、癒やし、成功、救い、解放において。

けれども、祈りやとりなしや祝福は、それが可能であり必要であるところで、不正や差別に対して現場で積極的に、力を尽くして立ち上がらないための口実にはなりません。

そして、闇から出て、それゆえ良い実を結ばない、どんな行いにも決して加わってはいけません。むしろ、そのような行いを明るみに出しなさい！

エペソ人への手紙5章11節

ローマ人への手紙5章17節、テモテへの手紙第一2章1〜7節、テモテへの手紙第二2章12節、ペテロの手紙第一2章5〜9節、ヨハネの黙示録1章5〜7節、5章9〜10節、22章5節

最後にもう一度、王イエスについて——この方は、人々のための神の代理の統治者です。

イエスはユダヤ人の王として生まれた；マタイの福音書2章2節。

イエスは神の国を宣べ伝えた；マタイの福音書4章17節、23節、12章28節。

イエスは、まだそれを最終的に実現されたわけではないとしても、目に見える世界と目に見えない世界に対するご自分の支配の要求を示された；マタイの福音書12章28節、ルカの福音書19章38節、ヨハネの福音書1章49節、しかしまた6章15節も。

イエスはご自分の教会を治め、奉仕のための権威を教会に授けておられる；マタイの福音書28章18節、エペソ人への手紙1章19〜22節。

イエスはダビデの王権を再興される；使徒の働き15章15〜17節、アモス書9章11〜12節。

イエスは勝利に満ちた、全世界の王として再び来られる；コリント人への手紙第一15章25節。

この方はすべての権威を持っておられ（マタイの福音書28章18節）、目に見えない霊的な国を治めておられ（ヨハネの福音書18章36〜37節）、後に目に見えるかたちで全地を治められる：詩篇66篇4節、72篇16〜19節、イザヤ書2章2節、ダニエル書7章13〜14節、18節、22節、27節、ヘブル人への手紙10章13節、ヨハネの黙示録15章4節。

Oh, if there's only one song I can sing, When in His beauty I see the great King, This shall my song in eternity be, 「Oh, what a wonder that Jesus loves me!」

ああ、もし私が歌える歌がただ一つだけなら、偉大な王をその麗しさのうちに見るとき、それこそが永遠に私の歌となりますように。「ああ、なんという不思議、イエスが私を愛しておられるとは！」

著者のほかの本

Und die Toten leben doch（それでも死者は生きている）、ビーレフェルト、1992年

Seitenwechsel – Von Adam zu Christus（陣営の転換――アダムからキリストへ）、ビーレフェルト、2011年

Entrückung, Himmel, Ewigkeit – Ein neuer Blick auf alte Themen（携挙・天国・永遠――古いテーマへの新しいまなざし）、ニュルンベルク、2015年

Gottes Lamm, Golgota und die Ewigkeit（神の小羊、ゴルゴタ、そして永遠）、ヴッパータール、2015年

Fantastische Himmelwelt, Lehre und Leben der Himmelwelt im Epheserbrief（すばらしき天上の世界――エペソ人への手紙における天上の世界の教えと生き方）、ニュルンベルク、2016年

Gott spricht, Eine erklärende Übertragung der allgemeinen Briefe und der Offenbarung（神は語る――公同書簡と黙示録の解説的翻訳）、ズルツベルク、2017年

Epheser, nacherzählt, erklärt für heute（パウロのエペソ人への手紙――語り直し、解き明かし、今日のために）、ズルツベルク、2018年

God's good Gospel, Gottes gutes Evangelium（神の良き福音）、ズルツベルク、2019年

Markus, nacherzählt, erklärt für heute（マルコの福音書――語り直し、解き明かし、今日のために）、ズルツベルク、2019年

Galater, nacherzählt, erklärt für heute（パウロのガラテヤ人への手紙――語り直し、解き明かし、今日のために）、ズルツベルク、2020年

Die Briefe des Johannes, nacherzählt, erklärt für heute（ヨハネの手紙――語り直し、解き明かし、今日のために）、ズルツベルク、2020年

Frauen, vergebt uns! – Die Rolle von Frau und Mann（女性たちよ、私たちを赦してください！――女と男の役割）、ズルツベルク、2020年

Frauen, vergebt uns! – Mann und Frau in Ehe und Gemeinde, Kurzversion（女性たちよ、私たちを赦してください！――結婚と教会における男と女、短縮版）、アウクスブルク、2022年

そのほかの文章は：www.hans-joerg-ronsdorf.de

これらの本は著者から、または書店で入手できます。多くはアマゾン（Amazon）の電子書籍としても入手できます。

hj-ronsdorf@t-online.de または 08376 929643